

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第267集

---

大里郡寄居町

---

# 箱石遺跡 II

---

県道広木折原線埋蔵文化財発掘調査報告

— VII —

2 0 0 1

埼玉県  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



箱石遺跡第2次調査区全景（空撮）



第1号窠跡



第1号集積土塊



第5号住居跡

## 発刊に寄せて

21世紀を迎え、わが国を取り巻く社会経済情勢は少子・高齢化の進行、高度情報化、地球環境問題の顕在化など大きく変化しています。

本県では、こうした変化に的確に対応し、県民一人一人が真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国」を実現するために、「環境優先」「生活重視」の基本理念のもと、計画的な県政の運営に努めています。

中でも道路は、県民生活や社会経済活動を支える最も基本的な社会基盤であります。私は、知事就任以来、「道路の善し悪しは、地域発展のバロメーターである」と考え、「県内1時間道路網構想」の推進を道路整備の目標のひとつに掲げ、高速道路から生活道路に至るまでの体系的な道路網の整備に努めてまいりました。

この一般県道広木折原線につきましては、児玉郡美里町広木と大里郡寄居町末野を結ぶ現道が狭隘なため、末野地区から荒川の対岸の寄居町折原までバイパスを整備することによって、美里町と寄居町をつなぐ新たな地域幹線道路として生まれ変わり、地域の活性化に大きな役割を果たすものと期待しているところでございます。

さて、寄居町は貴重な文化財や史跡の多いことで知られており、国指定史跡「鉢形城」や「末野窯跡群」は著名ですが、一般県道広木折原線の建設予定地にもいくつかの遺跡が発掘調査され、重要な成果があがっています。

「箱石遺跡」もそのうちのひとつであり、調査成果をまとめた報告書が刊行の運びとなりました。郷土学習を始め、生涯教育、学術研究の基礎資料などとして県民文化向上のためにご利用いただければ幸いです。

平成13年3月

埼玉県知事

土屋 紘彦

## 序

埼玉県では「新しい発展と豊かな生活を支える基盤づくり」の一環として、県民の生活圏の拡大に対応し、また高度化する産業活動の円滑化を図るために、総合的な道路網の整備が進められています。

県道広木折原線の工事も「県内1時間道路網構想」にもとづくもので、従来の県道広木末野線が狭隘なため拡幅整備するとともに、荒川に架橋し、寄居町折原まで延伸することによって、児玉町と小川町方面とを結ぶ地域幹線道路にしようとするものがあります。

この道は、上州と秩父を結ぶ重要な道路であったため、沿線には関東地方でも有数の規模を誇る末野古窯跡群や花園城、円良田城、広木城などの中世の城跡等、多くの文化財や史跡等が残されています。当事業団ではこうした建設用地内のいくつかの遺跡について発掘調査を行い、すでに何冊かの報告書を刊行したところですが、今回報告する箱石遺跡もそのひとつであります。

箱石遺跡の取扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、当事業団が道路建設課の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

その結果、縄文時代中期の敷石住居跡、埴輪を伴うものを含む4基の古墳跡、平安時代の須恵器窯と工人の住居跡、中世の屋敷跡などが明らかとなりました。

これらの成果をまとめた本書が先人の暮らしぶりを偲ぶよすがとなり、埋蔵文化財の保護、教育機関の参考資料、学術研究の基礎資料などとして広く御活用いただけるならば幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査の調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘から報告書刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県土木部道路整備課、同熊谷土木事務所、寄居町教育委員会、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 中野健一

# 例言

1. 本書は、埼玉県大里郡寄居町に所在する箱石遺跡の第2・4次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略称と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。  
箱石遺跡（HKIS）  
埼玉県大里郡寄居町大字末野1482-1他  
通知：平成10年5月20日付け 教文第2-32号  
指示通知：平成12年2月7日付け 教文第2-135号
3. 発掘調査は、県道広木折原線建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。  
発掘調査は、第2次調査を宮井英一と田中広明が担当し、平成10年6月1日から7月31日まで実施し、第4次調査を宮井英一と伴瀬宗一が担当し、平成12年2月1日から3月24日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量、および航空写真撮影は株式会社東京航業研究所に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真は、宮井英一、田中広明、伴瀬宗一が撮影した。  
遺物の写真撮影は大屋道則が行った。
7. 整理・報告書作成作業は若松良一が行い、平成12年10月1日から平成13年3月23日まで実施した。
8. 出土品の整理及び図面の作成は、昼間孝志、山本禎、瀧瀬芳之、田中広明、石塚 香、植木智子、兵 ゆり子、永井いずみの協力を得て若松が行った。また、縄文時代の遺物の実測は細田 勝が、鉄器の実測は瀧瀬芳之が行った。
9. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、IV-1の縄文時代を細田 勝が行い、他を若松が行った。
10. 本書の編集は、若松が行った。
11. 本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
12. 本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏からご指導を賜った。  
寄居町教育委員会 浅野晴樹 石塚三夫  
大森立哉 小林 高 鈴木宜良 鈴木秀男  
中島 宏 渡辺 一

# 凡例

1. 本書挿図中におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。

2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準直角座標に基づいて設置しており、10m×10mの方眼である。

3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、東西方向西から東へA～、南北方向北から南へ1～、と番号を付けている。

4. 遺構図及び遺物実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

## 遺構図

住居跡・土壙・井戸跡	1/60
カマド	1/30
窯跡	1/60・1/40
古墳	1/160
溝跡	1/80・1/160

## 遺物図

土器	1/4
埴輪拓影図	1/4
縄文土器拓影図	1/3
石器	1/3
鉄製品	1/3

上記に合わないものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度示している。

5. 全測図等に示す遺構標記の略号は以下のとおりである。

S J・住居跡 SC・集積土壙 SE・井戸跡

SK・土壙 SD・溝跡 SS・古墳周溝

SF・窯跡 SX・石敷き列

遺構図中のドットは、遺物の出土位置を示す。

6. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位mである。

7. 出土状況図に付した番号は遺物実測図の番号と一致する。

8. 観察表の凡例は以下のとおりである。

・法量の（ ）内の数値は推定値であり、単位はcmである。

・胎土は主に肉眼で観察された含有物を以下の番号に示した。

A：赤色粒 B：石英 C：長石 D：角閃石

E：白色粒 F：白色針状物質 G：雲母

H：砂粒 I：片岩 J：礫 K：チャート

L：輝石 M：黒色粒

・焼成はI（良好）II（普通）III（不良）の3ランクに分類した

・色調・胎土色は『新版標準土色帳』（農林省水産技術会議事務局監修1967）に照らし、最も近似した色相を記した。

・残存率は、実測図に現した部位を100%として算定したものである。

9. 本書に掲載した地形図は、以下のものを使用した。

国土地理院 1/25000地形図「寄居」「鬼石」「安戸」「皆野」

寄居町都市計画図 1/2500



# 目次

口 絵

発刊によせて

序

例 言

凡 例

目 次

I 発掘調査の概要	1	2. 古墳時代	24
1. 調査に至る経過	1	3. 平安時代	41
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	4. 中 世	78
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	V まとめ	93
II 遺跡の立地と環境	4	1. 箱石第1号窯と工房等出土土器の編年	93
III 遺跡の概要	12	2. 箱石館跡と末野中世遺跡群について	97
IV 遺構と遺物	15	3. 結 語	102
1. 縄文時代	15		

# 挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形図	4	第14図 第1号墳周溝出土遺物(1)	26
第2図 末野遺跡群と周辺の地形	6	第15図 第1号墳周溝出土遺物(2)	27
第3図 箱石遺跡と周辺の遺跡(古墳~中世)	10	第16図 第1号墳周溝出土遺物(3)	29
第4図 箱石遺跡全体測量図	13	第17図 第1号墳周溝出土遺物(4)	30
第5図 第4号住居跡・遺物分布図	14	第18図 第1号墳周溝出土遺物(5)	31
第6図 第4号住居跡出土遺物(1)	16	第19図 第2号墳周溝	34
第7図 第4号住居跡出土遺物(2)	17	第20図 第3号墳周溝・第10号土壙	36
第8図 第4号住居跡出土遺物(3)	18	第21図 第2・3号墳周溝出土遺物(1)	37
第9図 第5号住居跡・出土遺物	19	第22図 第3号墳周溝出土遺物(2)	38
第10図 第14・15号土壙・出土遺物	21	第23図 第4号墳周溝・出土遺物	39
第11図 グリッド出土遺物(1)	22	第24図 グリッド出土遺物	40
第12図 グリッド出土遺物(2)	23	第25図 第1号住居跡・カマド・出土遺物	41
第13図 第1号墳周溝	25	第26図 第2号住居跡	43

第27図	第2号住居跡カマド詳細図	44	第50図	第2号集積土壙・グリッド出土遺物(1)...	75
第28図	第2号住居跡出土遺物(1)	45	第51図	第2号集積土壙・グリッド出土遺物(2)...	76
第29図	第2号住居跡出土遺物(2)	46	第52図	第1号溝	78
第30図	第3号住居跡	47	第53図	第1号溝出土遺物	79
第31図	第3号住居跡出土遺物(1)	48	第54図	第2号溝	80
第32図	第3号住居跡出土遺物(2)	49	第55図	第3号溝	81
第33図	第1号窯跡(1)	51	第56図	第3号溝出土遺物	82
第34図	第1号窯跡(2)	52	第57図	第4号溝	84
第35図	第1号窯跡灰原	53	第58図	第4号溝出土遺物	85
第36図	第1号窯跡出土遺物(1)	55	第59図	第5号溝	86
第37図	第1号窯跡出土遺物(2)	56	第60図	第1号井戸跡	87
第38図	第1号窯跡出土遺物(3)	57	第61図	石敷き列	88
第39図	第1号窯跡出土遺物(4)	58	第62図	第1号井戸跡・第7号土壙・グリッド 出土遺物	89
第40図	第1号窯跡出土遺物(5)	59	第63図	第1～9・13・16号土壙	92
第41図	第1号窯跡出土遺物(6)	60	第64図	箱石遺跡土器変遷図	94
第42図	第1号窯跡出土遺物(7)	61	第65図	9世紀後半を中心とする末野窯産 須恵器編年図	96
第43図	第1号窯跡出土遺物(8)	62	第66図	箱石中世館跡と藤田氏館跡	99
第44図	第1号窯跡出土遺物(9)	63	第67図	末野中世遺跡群	99
第45図	第1号窯跡出土遺物(10)	64	第68図	箱石館跡及び周辺遺跡出土の類似する 在地産中世土器	100
第46図	第1号窯跡出土遺物(11)	65			
第47図	第1号集積土壙	71			
第48図	第1号集積土壙出土遺物(1)	72			
第49図	第1号集積土壙出土遺物(2)	73			

# 図版目次

- 図版1 第4号住居跡(南から)  
第4号住居跡(西から)
- 図版2 第5号住居跡(全景)  
第5号住居跡(炉跡)
- 図版3 第14号土壙 第15号土壙
- 図版4 遺跡全景(北から) 第1号墳周溝・1号窯跡
- 図版5 第1号墳周溝 第1号墳周溝内石列
- 図版6 第1号墳周溝埴輪出土状況 第2号墳周溝
- 図版7 第3号墳周溝 第3号墳周溝外第10号土壙
- 図版8 第4号墳周溝(西から)  
第4号墳周溝(東から)
- 図版9 北区全景(東から) 北区全景・第5号溝
- 図版10 全景(南から) 第3号住居跡・3号溝全景
- 図版11 調査区東部遠景(南から) 第1号住居跡
- 図版12 第1号住居跡カマド  
第2号住居跡(南から) 完掘
- 図版13 第2号住居跡(西から) 同遺物出土状況
- 図版14 第2号住居跡(北カマド) 同遺物出土状況
- 図版15 第2号住居跡(東カマド) 同遺物出土状況
- 図版16 第2号住居跡粘土貯蔵穴 第3号住居跡
- 図版17 第1号窯跡全景
- 図版18 第1号窯跡(西から) 第1号窯跡(南から)
- 図版19 第1号窯跡煙道(西から) 同(南から)
- 図版20 第1号窯跡灰原(南から) 同(西から)
- 図版21 第1号窯跡集積 第1号集積土壙完掘
- 図版22 第1号集積土壙第1検出面 同第2検出面
- 図版23 第1号集積土壙半載状況 同第4検出面
- 図版24 第1号集積土壙第4検出面
- 図版25 第1号井戸跡 第1号溝
- 図版26 第2号溝全景 第2号溝遺物出土状況
- 図版27 第3号溝 第3号溝南半部分
- 図版28 第3号溝遺物出土状況 第4号溝
- 図版29 第4号溝 第4号溝遺物出土状況1・2
- 図版30 第4号溝遺物出土状況3 同4
- 図版31 第4号溝遺物出土状況5 同6
- 図版32 第5号溝 第1号石敷き列
- 図版33 第4号住居跡出土石斧・凹石
- 図版34 第1・3号墳周溝出土遺物
- 図版35 第1号墳周溝出土形象埴輪(人物1・2)
- 図版36 第1号墳周溝出土形象埴輪(馬1・2)
- 図版37 第1号墳周溝出土形象埴輪(器財1・2・3)
- 図版38 第2・3号住居跡・第1号窯跡出土遺物
- 図版39 第1号窯跡出土遺物
- 図版40 第1号窯跡・第1号集積土壙出土遺物
- 図版41 第1・2号集積土壙・第3号住居跡  
第1号窯跡出土遺物
- 図版42 第1号窯跡・第1号集積土壙出土遺物
- 図版43 第1号集積土壙出土遺物
- 図版44 第1号集積土壙・第1号窯跡出土遺物
- 図版45 第1号窯跡出土遺物
- 図版46 第1号窯跡出土遺物
- 図版47 第1号窯跡出土遺物
- 図版48 出土瓦
- 図版49 第1号窯跡出土遺物  
第1号窯跡・第2号集積土壙・第2号住居跡  
出土土製品
- 図版50 第3・4号溝出土遺物

# I 調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は関東地方の中西部に位置し、県土全域が都心から100kmの圏内に含まれる。県では快適でうまいのある生活空間の形成のために、道路網の整備を進めている。「県内1時間道路網構想」を推進し、高速道路、地域高規格道路、インターチェンジにアクセスする道路、都市内街路から生活道路に至るまで、体系的な道路網の整備計画である。県道広木折原線の整備もこうした事業の一つである。

道路建設課からの同事業地内の文化財所在地及び取扱いについての照会に対し、予定地には箱石遺跡が存在し、事業計画上やむを得ず現状変更をする場合には、事前に文化財保護法第57条の第3項の規定に基づき、発掘通知を提出し、記録保存のために発掘調査を実施するよう回答した。

その後、道路建設課と文化財保護課との間で取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であり、記録保存の措置を講ずることになり、発掘調査の実施機関で

ある(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、道路建設課・文化財保護課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第57条3項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出されて調査が実施された。

発掘調査の期間と発掘調査に係わる通知は以下のとおりである。

発掘調査(第2次)

期間:平成10年6月1日～平成10年7月31日

通知:平成10年5月20日付け教文第2-32号

発掘調査(第4次)

期間:平成12年2月1日～平成12年3月24日

通知:平成12年2月7日付け教文第2-135号

(文化財保護課)

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

発掘調査は第2次調査を平成10年6月1日から平成10年7月31日まで、第4次調査を平成12年2月1日から平成12年3月24日まで実施した。

#### 第2次調査

6月初旬、発掘調査の準備を進め、重機による表土掘削を開始する。表土除去は6月中頃まで行った。

重機の表土除去が終了してから、人力で遺構確認を行ったが、礫混じりで、水もちが悪く、乾燥しやすいため、散水を繰り返しながら行った。プラン確認後、遺構の掘り下げを開始した。古墳の周溝内には大きな礫が大量に堆積しており、人力での除去には労力を要した。また第1号墳の周溝内からは須恵器窯が発見されたが、周溝覆土のプラン確認時には把握ができず、後で苦勞する結果となった。

基準点測量は6月の下旬に行い、遺物包含層の掘り下げと同時に、設定したグリッドで、遺物の取り上げを行った。

遺構確認、遺構精査は7月の中旬頃までに行い、遺構の写真撮影、測量などを含めて、7月の中旬頃までに終了させた。

7月の下旬には、調査区全体を清掃し、空中写真を撮影した。

7月末には、発掘調査を全て終了し、発掘機材などを片付け、調査事務所を撤収した。

#### 第4次調査

1月下旬、立ち退き民家の基礎撤去作業を先行して着手し、同時に事務所の設置と発掘調査準備を行った。2月初頭、重機による表土掘削を開始したが、国道に沿うB区はとくに慎重に実施した。B区の表土は想像以上に厚かったが、遺構面に達する攪乱部が広がっていた。グリッド杭打ちは表土除去終了後、ただちに行った。

2月上旬、表土剥ぎの終了したA区から、人力で遺構確認を開始した。毎朝、霜柱の除去を実施し、凍結した表土が解けないとジョレンの刃が立たない状況で

あった。引き続き、第1号集積土壙、第3・4号溝、第1号墳周溝の掘り下げ調査に入った。第1号集積土壙は礫と遺物を大量に含むため、4面に分けて掘り下げと記録を行った。他の遺構については第2次調査で検出された遺構の延長部分であり、両次の測量図の整合性に配慮した。

3月上旬から国道沿いのB区のプラン確認及び掘り下げ調査に入った。攪乱部が多かったが、かろうじて第5号住居跡（敷石住居）の中央部分が遺存していた。第5号溝も同様の遺存状態であった。このほか2基の古墳周溝部が検出されたが、第6号古墳の遺存状態は悪かった。

3月下旬、A・B両区の各遺構の精査を終了し、清掃の上、写真撮影を実施した。

3月24日には発掘調査を全て終了し、発掘機材の撤収を行った。遺構面の土入れが全て終了し、事務所を撤去したのは3月末に近い頃であった。

### (2) 整理・報告書作成

整理事業は平成12年10月1日から平成13年3月23日まで実施した。

10月初頭から遺物の水洗・注記を行い、同時に図面・写真の整理を行った。

遺物の復元は、接合などの作業と同時進行したが、多量の須恵器と細かく割れた埴輪片があり、手間取った。復元された遺物は、順次実測を行い、拓本及びトレースなどの墨入れを行った。

遺構の図面整理は、10月初旬から行ったが、隣接する第5次調査の測量図も参考にして、全体図を作成した上で、遺構実測図の整理を行った。遺構図は12月上旬よりトレースを行い、版組みも同時進行で行った。

1月上旬から遺物の写真撮影を行い、1月中旬には報告書の割付けを終了させる。

原稿は、11月の中旬より執筆を開始し、1月中旬に終了させた。

報告書は、2月中旬より校正を開始し、3月上旬に終了し、印刷にかかり、3月23日をもって刊行した。

### 3. 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

#### (1) 発掘調査（平成10・11年度）

理事長 荒井 桂  
 副理事長 飯塚 誠一郎  
 常務理事  
 兼管理部長 鈴木 進 (平成10年度)  
 広木 卓 (平成11年度)

#### <管理部>

専門調査員  
 兼経理課長 関野 栄一 (平成10年度)  
 副部長  
 兼経理課長 関野 栄一 (平成11年度)  
 庶務課長 金子 隆 (平成11年度)  
 主査 田中 裕二 (平成11年度)  
 主任 江田 和美  
 主任 長滝 美智子  
 主任 福田 昭美  
 主任 腰塚 雄二  
 主任 菊池 久

#### <調査部>

調査部長 谷井 彪 (平成10年度)  
 調査部長 増田 逸朗 (平成11年度)  
 調査部副部長 水村 孝行  
 調査第三課長 浅野 晴樹 (平成10年度)  
 主席調査員 杉崎 茂樹 (平成11年度)  
 統括調査員 宮井 英一  
 主任調査員 田中 広明 (平成10年度)  
 主任調査員 伴瀬 宗一 (平成11年度)

#### (2) 整理作業（平成12年度）

理事長 中野 健一  
 副理事長 飯塚 誠一郎  
 常務理事  
 兼管理部長 広木 卓

#### <管理部>

管理部副部長 関野 栄一  
 主席(庶務担当) 阿部 正浩  
 主席(施設担当) 野中 廣幸  
 主任 菊池 久  
 主席(経理担当) 江田 和美  
 主任 長滝 美智子  
 主任 福田 昭美  
 主任 腰塚 雄二

#### <調査部>

調査部長 高橋 一夫  
 資料副部長 鈴木 敏昭  
 主席調査員  
 (資料整理担当) 磯崎 一  
 統括調査員 若松 良一

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

箱石遺跡は、埼玉県大里郡寄居町大字末野字下日山1482-1番地に所在し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集『城見上／末野III／花園城跡／箱石』で報告した箱石遺跡の国道140号線を挟んだ南側隣接地にあたる。調査区の南限は荒川の左岸崖線に接している。その位置は秩父線波久礼駅を基準にすると東南へ1.4km、寄居の市街からは西へ2.2kmである。

埼玉県の西半部を占める山地は、大きく奥秩父山地、外秩父山地、上武山地に分かれる。遺跡は外秩父山地と上武山地を分かつ荒川の河岸段丘上に立地し、遺跡の背後には上武山地が連なり、前方には外秩父山地を間近に臨むことができる。(第1図)

遺跡の立地する河岸段丘を含む山地は、群馬県下仁田町南部から埼玉県越生町まで広がる三波川帯の結晶片岩を基盤とするものである。岩盤の上には片岩が風化した粘土層が広がっている。城見上遺跡A・B区及

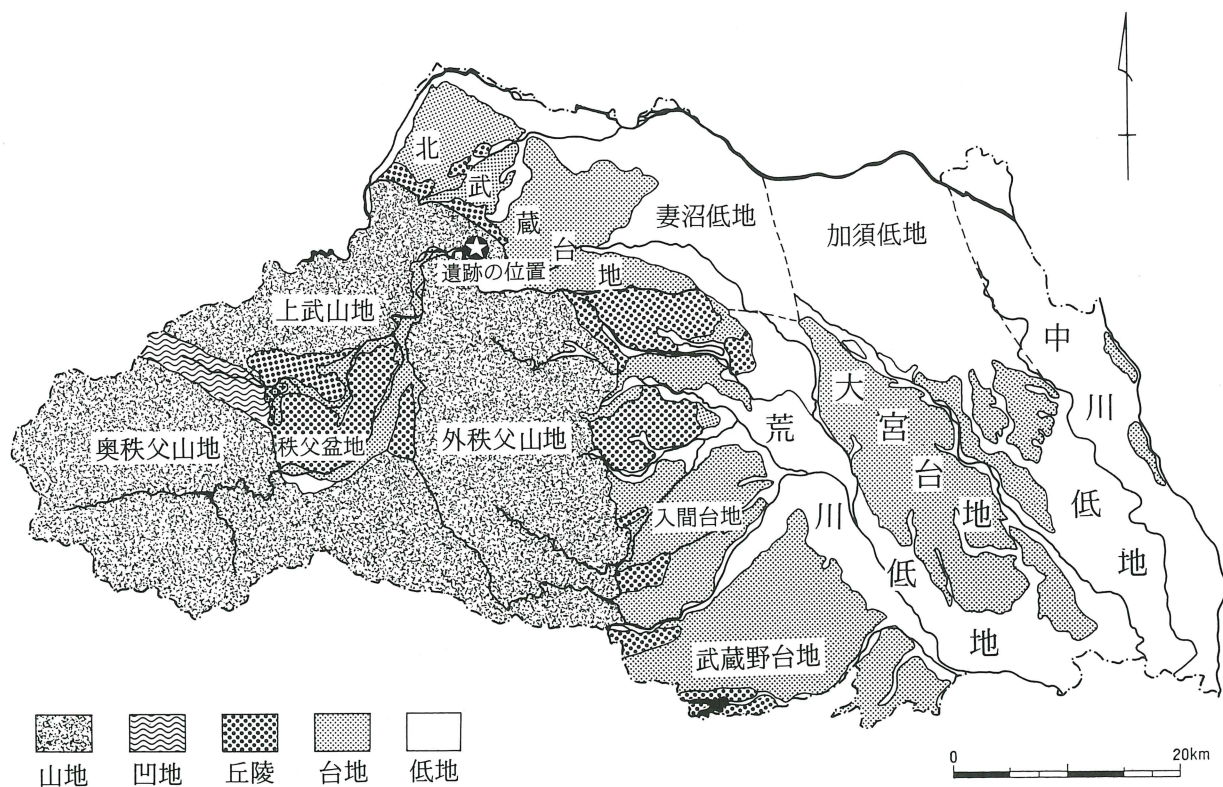
び末野遺跡D区で確認された粘土採掘坑は、この粘土を採取するためのものである。(堀口 1998)

遺跡の南側に接するように荒川が流れる。寄居町は荒川の上流域から中流域に当たり、荒川総合調査報告書の流区では、B区(荒川村三峰口から寄居町小園の区間)からC区(寄居町小園から熊谷市久下の区間)に変わる地点にあたる。

両岸に江南台地や櫛引台地、波久礼を扇頂とする荒川扇状地が開析され河岸段丘が形成されている。名勝「玉淀」はこの開析によって形成された景観である。遺跡の立地する左岸の河岸段丘は、右岸の江南台地に対比されるものである。荒川からは、扇状地の河岸段丘の寄居面I・寄居面IIの更に1段上の3段目に当たる。

遺跡ののる河岸段丘は、荒川に注ぐ小河川により更に樹枝状に複雑に開析されている。

第1図 埼玉県の地形図



## 2. 遺跡の歴史的環境

### (1) 末野遺跡群の概要

箱石遺跡の西側には荒川の河岸段丘が形成され、東西約1km、南北約0.8kmの緩傾斜地が開けている。その北側は兎玉、大里郡界をなす鐘撞堂山（標高330.2m）から派生する御嶽山（標高247m）によって、東側は花園城のある城山（標高207.6m）によって画され、西側も陣見山（標高531.0m）から派生する山裾によって境されている。したがって、北と東、西の三方を山に抱かれ、南側が荒川に向かって開けた半独立的な地形となるが、荒川はここでほぼ直角に屈曲し、南北方向の流路を東西方向へと転じている。河岸段丘は、これに沿い、一般国道140号が通じているが、この道は、かつての秩父往還川通りとほぼ一致し、地形的制約から、古代以来の秩父と当地を結ぶ古道を踏襲したものであったことは疑いない。ただし、末野地区においては、秩父往還は現道と異なるルートを取り、いったん北上してから、ふたたび西へ進み、宿の集落を通過していた。

この地勢的に独立性の高い末野地区の歴史的環境は、箱石遺跡を理解する上で不可欠な近接的歴史情報に当たるので、当事業団が実施した県道広木折原線建設工事に伴う発掘調査の成果を中心に寄居町教育委員会の調査成果も加え、末野遺跡群として一体的に把握した上で概述することしよう。

箱石遺跡の国道を挟んだ北側隣接地である1次調査区（L区）では、わずかに残るマウンドから石室の一部が露出する古墳があり、調査の結果、胴張りのある横穴式石室を有し、墳丘径18m、周溝外径25mのやや規模の大きい円墳であることが判明した。副葬品として、鎌と弓金具が盗掘を免れて遺存していた。周溝内からは円筒、朝顔形埴輪のほか、人物、鞍、家などの形象埴輪も出土した。6世紀後葉の築造とみられよう。平安時代の遺構は、竪穴住居跡8軒と8基の土器焼成土壇がある。後者は古墳の周溝内に並ぶように5基が検出され、高台付坏を中心とした須恵器と瓦が出土したが、窯の本体ではなく、廃棄の場として据えら

れた。中世の遺構には2間×4間以上の掘立柱建物跡1棟が検出された。周辺から、かわらけ、片口鉢、播鉢等が出土しており、これらが伴うとみれば、中世後期の建物となる。このほか、包含層から五領ヶ台式、加曾利E式などの縄文土器片が出土している。

調査区西北側に隣接し、国道140号線の南側に沿う第5次調査区（N区）では、古墳時代の遺構として、2基の古墳の周溝部と1軒の竪穴住居跡が検出された。古墳の周溝内からは、多数の埴輪片が出土した。住居跡は古墳時代後期のもので、1辺約6mの大型住居であった。奈良時代の遺構として5基の製鉄炉と廃滓場、粘土採掘坑、作業場跡の一連の製鉄遺跡がある。製鉄炉は関東では例の少ない箱形炉で、廃滓場に伴う須恵器片から8世紀初頭に比定できる。平安時代の遺構として、1軒の竪穴住居跡と3基の須恵器窯がある。このうち第1・2号窯は斜面を利用した登り窯で、9世紀初頭頃の築窯である。第3号窯は平坦地を掘り下げて焚き口部を造っており、9世紀末から10世紀初頭頃の築窯と推定されている。このほか、中世の遺構として、生産遺構の可能性のあるSW3があり、2基の井戸と6条の溝の中にも中世に属するものが含まれている。

調査区の北側に120m離れ、秩父鉄道線を南限とする箱石遺跡第3次調査区（K区）では、7世紀後半代とみられる4軒の竪穴住居跡が検出され、このうち第4号住居跡からは鍛冶炉、第1号住居跡からは鉄滓が出土している。このほか、時期不明の溝2条、土壇5基、多数の柱穴がある。

調査区の北西900m付近に広がる城見上遺跡（A・B区）では、縄文前期の住居跡1軒が検出され、黒浜式期に比定されている。包含層からは中期から後期の縄文土器片も出土している。奈良から平安時代の遺構としては、重複する状態で掘削された粘土採掘坑群があり、多量の土器片が廃棄されていた。中近世の遺構としては、地下式土壇3基が検出されたが、周辺から、



第2図 末野遺跡群と周辺の地形



かわらけ1点と内耳鍋形土器4個体分が出土しており、中世後期に所属する可能性がある。南側に200m離れた城見上遺跡B地点と、その東側200mに位置する末野遺跡第2次調査区はともに寄居町教育委員会によって調査が行われ、前者から8軒の、後者から3軒の竪穴住居が検出された。両遺跡では7世紀の前半と末の住居跡に粘土溜りがあり、工房を兼ねていた可能性が考えられる。

調査区の北北西600m付近にある末野遺跡(C～F区)は範囲がやや広い。最も西側のC区からは、局部磨製石斧、ナイフ形石器、縦長剥片石器で構成される旧石器群が出土し、当時は県内最古の3万年前の石器として注目された。平安時代の遺構としては、竪穴住居2軒があり、付近からは「蔵」のへら描きのある土師器甕が出土している。中世の遺構としては、3条の溝と4軒の掘立柱建物跡、地鎮に用いたとみられる羯磨を墨描きしたかわらけを納めたピットなどが検出された。航空写真を用いた検討の結果、38.4×28.2mの不整形の溝に囲まれた中世後期の屋敷跡と推定された。C区の東側に隣接するD区では、平安時代の遺構として、竪穴住居跡1軒、粘土採掘坑などが検出されている。中世の遺構としては、井戸2基と柵列3条がある。

D区の東側に隣接するE区からは、奈良から平安時代の5軒の竪穴住居跡と5基の土壙が検出されている。住居跡には粘土溜りを伴うものがあり、当て具と推定できる石製品の出土からみても、須恵器工人の住居兼工房であった可能性が高い。土壙には、須恵器の原料である粘土を採掘した穴を含んでいる。

E区の東側に隣接するF区からは合計4基の須恵器窯跡と一連の灰原が検出されている。このうち西側に位置し、山裾に沿う谷筋に並んだ状態で検出された3基の須恵器窯跡は、いずれも古墳時代後期に属するものであった。最古の第3号窯跡からは、行田市の埼玉古墳群中の山古墳例と共通する須恵質埴輪壺が出土し、供給関係が確認された。6世紀末ないし7世紀初頭に位置づけられ、現在のところ末野窯跡群中、最古の窯

となる。東側に40mほど離れて検出された第5号窯跡は坏、高台付坏、皿を製品とする平安時代の窯であったが、その下部に広がる灰原からは7・8世紀代の須恵器片が大量に出土し、関東地方では初出土の獣脚硯が含まれていた。また、寄居町教育委員会では平成12年度に、1号窯の北側隣接地の調査を行い、9基の窯跡と灰原を検出した。年代は7世紀のものが6基、9世紀代のものが3基である。窯の構造上注目されるのは、焚口や煙出し部に板石を多用している点であり、全国的にみても特殊なものである。

調査区の北方400mの位置にあり、花園城のある城山の西側裾部をかすめる花園城跡調査区(J区)では2条の溝が検出され、上幅はそれぞれ、3.5m、2.5mであった。詳細な現地踏査の結果、花園城の城山裾部を巡る堀の一部の可能性が指摘されている。周辺からは北宋銭が採集されている。

以上、概述したのは末野遺跡群のうち、氷山の一角に過ぎない知見ではあるが、約3万年前の旧石器時代から現代に至る当地の歴史の一端が窺える。以下に、末野遺跡群の時代的推移を略述しておこう。縄文前期には定住生活が始まり、中・後期と生活の痕跡を確認することができるが、弥生時代の遺構と遺物は確認されていない。当地が傾斜地であり、さらに、土壌的に水持ちが悪く、水田化が困難であったことがその一因かも知れない。降って、古墳時代後期、6世紀後葉には、古墳群の形成が始まる。箱石遺跡の各調査区から、合計7基の古墳跡が検出されたが、いずれも直径20m内外の円墳で、前方後円墳は含まれていない。埴輪を伴うものと、伴わないものがある。主体部は胴張りのある無袖型の横穴式石室が明らかにされており、児玉郡地域との共通性が考えられよう。末野古窯跡群の操業開始期が、これらの古墳とほぼ同時と推定されるので、被葬者は初期の末野窯跡群の在地管掌者層であった可能性が考えられよう。その上位にあったのが中の山古墳の被葬者であり、埼玉古墳群と密接な関係をもった形で末野窯跡群の開窯が行われたと考えてよいだろう。N区からは1辺6mの該期の大型竪穴住居

1軒が検出されており、居住地は古墳の周囲に存在する可能性が高い。

現在のところ、末野窯跡群で最古の窯跡は、F区の末野遺跡に所在した末野窯跡群第V支群の第3号窯であり、6世紀末頃に比定されている。中の山古墳への須恵質埴輪壺の供給が知られるばかりでなく、周辺部にある小前田、黒田、寄居、金崎などの古墳群の副葬品にも同窯の製品の可能性が高いものが含まれている。第V支群中には、第3号窯に継続する7世紀代の窯跡が合計8基調査されており、第5号窯下の灰原からは7・8世紀代の須恵器片に混じって獣脚硯が発見され、瓦が併焼されていた窯も存在するので、寺院と官衛に製品を供給することを第一目的とする官窯としての末野窯跡群の性格が明確である。続く9世紀代の窯跡も第V支群中で5基が調査されており、末野窯跡群最盛期の生産器種や生産量の膨大さを窺うことができる。この9世紀代には築窯立地の変化が認められ、荒川に程近い平坦地であるN区（箱石遺跡第5次調査区）にも9世紀初頭の須恵器窯である第1・2号窯がわずかな傾斜面を巧みに利用して築かれていた。このことは、増大する需要に対応するため、周辺部への窯の増築が図られた結果とみられよう。そして、9世紀後半代には今回報告分のM区の第1号窯のように古墳の周溝内に築かれるものが出現し、末野窯の終焉期と推定される9世紀末から10世紀初頭においては、N区の第3号窯のように平坦地を掘り下げて築窯するものが登場する。これらの窯の規模は総じて小規模である。L区では古墳周溝内に掘削された5基の土器焼成遺構が発見されているが、荒川対岸の折原石道遺跡で検出された同様の遺構においても、土師質の製品が生産されていたことが確認されている。10世紀初頭頃には、末野窯跡群から東方へ約4km離れて桜沢窯跡が開窯されるように、末野窯跡群終焉期の拡散と分派活動の状況は、古代的生産様式から中世的なそれへの移行を示すものとして把握できる可能性があるだろう。

末野窯跡群の工人たちは、窯の移動、拡散によってたびたび住居の移転を余儀なくされた。山寄りの城見

上遺跡B地点では7世紀代の粘土溜りを伴う工房兼住居が検出され、E区（末野遺跡）では奈良から平安時代の5軒の住居跡が検出され、粘土溜りを伴う工房が含まれていた。川寄りのM区（箱石遺跡）でも、これとよく似た粘土溜りを伴う第2号住居跡が検出されている。これらの工房付近には原料を得るために掘削した粘土採掘坑のある場合が多い。A・B区（城見上遺跡）には、奈良から平安時代にかけて著しい数の粘土採掘坑が掘られていた。

ところで、平成12年度に行われた箱石遺跡第5次調査では8世紀初頭頃に築かれた5基の製鉄炉が発見され、大きな話題を提供したが、このことは、末野窯跡群が須恵器と瓦の生産を行うばかりでなく、製鉄業を同時に行っていたことを示すものである。窯業と製鉄業は焚き木を燃やし火を窯の中でコントロールすることによって製品を得る新技術として、強い共通項を有しており、広義の窯業に包括できるものであることを改めて認識する。古代の末野生産遺跡群が、8世紀初頭の段階に、複合的工業基地として生産体制を整備した目的は、本格的な律令体制の地方施行にあたって最初に官と寺の創設のための建築材としての瓦や釘などとその汁器類を早急に準備するためであり、その背景には極めて政策的な必然性があったと考えられよう。しかし、このような官営工房も律令体制の衰退と共にその役割を終える。それは10世紀初頭ないし前半頃のことであろう。

末野の地は倭名抄にいう榛沢郡五郷のうらの藤田郷に属していた可能性が高く、ここを本拠とする藤田氏が興ったのは10世紀後半頃といわれている。武蔵七党猪俣党の有力な一支族である。箱石遺跡に接する花園城（5）は『新編武蔵風土記稿』によれば、相模守小野時季が九代の孫、五郎政行が築城して以来、藤田氏十五代の在城を伝える。しかしながら、山城は基本的には戦国時代の城であって南北朝を遡るような例は知られていない。良く遺存する城郭本体には特徴的な二重堅堀が効果的に用いられており、典型的な戦国期山城である「藤田氏系城郭」の代表例として、つとに

知られているところである。その築城年代は、康邦の先々代にあたる十三代國行か十四代國村の頃であろうか。発掘調査による確認が俟たれる。

末野遺跡群中で調査された中世の遺構として、C区（末野遺跡西部）で検出された不整形の溝に囲まれた小規模な屋敷跡、D区（末野遺跡中部）で検出された2基の井戸と3条の柵列、A・B区（城見上遺跡）で検出された3基の地下式土壇、L区（箱石遺跡北部）で検出された2間×4間以上の掘立柱建物跡、N区（箱石遺跡第5次調査区）で検出された生産遺構SW3と2基の井戸及び6条の溝、そして今回報告する方形区画溝を伴う館跡と1基の井戸がある。これらは相当広範囲に分布し、内耳鍋形土器、播鉢、かわらけなどを伴う例があるので、多くが中世後期に属するものと推定される。花園城との前後関係など厳密につめるべき課題はあるが、同時存在の施設であった可能性が最も高いであろう。山城が戦時の詰め城であり、平時の領主館は麓にあり、根古屋や付帯施設がこれを取りまいていたと仮定した場合、散在するこれらの中世遺構の性格を明らかにしていくことは重要な課題となつてこよう。

箱石遺跡M区のわずか300m程西側の字日山の地には土塁の一部が残存しており、藤田氏館（6）の推定地とされている。造営年代は鎌倉時代とされており、発掘調査では空白期となっている中世前期の藤田氏の本拠となる可能性がある。この地の歴史を連続的に把握していく上では、最も調査の俟たれる遺跡となろう。しかし、現在のところ、この藤田氏館についての具体的なデータは殆どなく、はたして中世前期の居館としてよいのかも含めて、今後の課題としなければならない。

このように、先行する発掘調査によって、末野地区の歴史的環境については予備知識が豊富である。この遺跡群の一角をなす箱石遺跡IIの検討や分析には、これらの成果が活かされなければならぬ。

なお、末野窯跡群の全容については『末野I』で詳しく触れているので、再論しないことにした。

## （2）末野遺跡群外郭部の諸遺跡

末野遺跡群の外郭部にも各時代の遺跡が濃密に分布している。まず古代・中世の遺跡について概述する。

花園城背後の御嶽山頂上には平場・堀・土塁が残存する花園御嶽城（7）があり、花園城の防御を目的とする枝城であった可能性が考えられよう。そのまた背後に位置する鐘撞堂山（標高330.2m）の南側尾根上には多数の平場が形成され、馬騎の内廃寺（8）が所在する。軒瓦から7世紀後半の建立で奈良時代中葉までの存続が推定されている。荒川左岸の波久礼付近には鎌倉時代に当地名を名乗った丹党葉栗氏の館跡（9）の存在が推定されている。秩父鉄道波久礼駅北側の荒川と山裾がもっとも迫った場所には北条氏邦の家臣高橋氏の守った破崩関所（10）があり、秩父往還を通行するものを検めた。主に甲斐の武田氏に対する軍事的な目的で設置されたものである。また、荒川の対岸を親鼻方面へ通じる岩田街道を通行する場合には、殿原の渡しを渡らなければならなかった。対岸の金尾地区には堀の内（11）の地名が残り、猪俣党金尾氏の館跡に比定されている。背後の金尾峠には要害山城（12）がある。発掘調査によって小規模な石垣も確認された。荒川の屈曲部に位置し、鉢形城の前衛的な遠見の砦であり、岩田街道を扼する目的で設置されたものであろう。金尾峠を越えて出た平場が長瀬町の岩田地区である。ここは古代に秩父牧を構成した石田牧（13）の置かれたところであり、その管掌者の子孫である岩田氏館（14）も付近にあったと推定されている。やや南よりには同祖白鳥氏の館（15）、さらに南の井戸地区にも同族の井戸氏館（16）の存在が推定されている。天神山城（17）は藤田康邦、北条氏邦の居城である。堅堀を伴う連郭式の山城であり、かなり大規模な石垣部分も遺存している。代表的な藤田系城郭である。長瀬溪谷を過ぎた皆野町下田野地区には室町時代とされる皆野館（18）と戦国時代とされる田野城（19）とが所在する。

対岸の秩父往還沿いでは、長瀬町矢那瀬地区背後の山頂に円良田城（20）が立地する。秩父郡では虎ヶ

第3図 箱石遺跡と周辺の遺跡（古墳～中世）



主要遺跡

- |             |            |               |            |             |             |
|-------------|------------|---------------|------------|-------------|-------------|
| 1 箱石遺跡      | 2 城見上遺跡    | 3 末野遺跡        | 4 花園城調査区   | 5 花園城       | 6 藤田氏館      |
| 7 花園御嶽城     | 8 馬騎の内廃寺   | 9 葉栗氏館跡       | 10 破崩関所    | 11 金尾堀の内    | 12 要害山城     |
| 13 石田牧      | 14 岩田氏館    | 15 白鳥氏館       | 16 井戸氏館    | 17 天神山城     | 18 皆野館      |
| 19 田野城      | 20 円良田城    | 21 末野窯跡群第19支群 | 22 仲山城     | 23 野上下郷板石塔婆 |             |
| 24 青石石材採掘遺跡 | 25 野上氏館    | 26 藤谷淵氏館      | 27 根岸山砦    | 28 金崎殿館     | 29 折原窯跡     |
| 30 折原石道遺跡   | 31 灰田原遺跡   | 32 露梨子遺跡      | 33 鉢形城     | 34 立原堀の内    | 35 島田氏屋敷跡   |
| 36 不動寺      | 37 富田堀の内   | 38 折原堀の内      | 39 釜伏関所    | 40 吉野廃寺     | 41 桜沢窯跡     |
| 42 用土北沢遺跡   | 43 甘粕山遺跡群  | 44 小前田氏館      | 45 飯塚氏館    | 46 桜沢堀の内    | 47 用土堀の内    |
| 48 猪俣小平六館   | 49 用土城     | 50 広木城        | 51 白石城     | 52 猪俣城      | 53 藤田古墳群    |
| 54 立ヶ瀬古墳群   | 55 上郷古墳群   | 56 小園古墳群      | 57 小前田古墳群  | 58 黒田古墳群    | 59 猪俣南古墳群   |
| 60 猪俣北古墳群   | 61 普門寺古墳群  | 62 羽黒山古墳群     | 63 白石古墳群   | 64 大仏古墳群    | 65 中里天神山古墳群 |
| 66 諏訪林古墳    | 67 神明ヶ谷戸古墳 | 68 佐久保地輪窯跡群   | 69 野上下郷古墳群 | 70 浅間山古墳    |             |
| 71 上長瀬古墳群   | 72 金崎古墳群   | 73 天神山古墳      |            |             |             |

岡城とも呼ばれている。ここからは秩父往還だけでなく、美里町へ至る児玉脇往還の眺望も利く。野上下郷には末野窯跡群第19支群(21)がある。末野窯跡群中心部からの距離は4.25kmである。中世の遺跡としては南北朝期の山城である仲山城(22)があり、野上下郷板石塔婆(23)には城主阿仁和兵助の供養のために建立した経緯を記す。付近には板石塔婆の青石切り出し遺跡(24)が現存する。荒川左岸の鎌倉時代館跡としては、丹党野上氏館(25)、同藤谷淵氏館(26)があり、皆野町金崎地区には時期不祥の根岸山砦(27)と金崎殿館(28)とがある。

寄居付近から秩父盆地に至るもう一つの道は赤浜から鉢形を経て釜伏峠を越える秩父往還山通りである。沿道の古代遺跡として、折原窯跡(29)、ロクロ土師器焼成遺構の発見された折原石道遺跡(30)、灰田原遺跡(31)、露梨子遺跡(32)などの集落遺跡がある。また、中世遺跡としては、長尾氏が築城し、後に藤田氏、北条氏邦が城主となった、大城郭鉢形城(33)があり、周辺部には城下町が形成されていた。立原堀の内(34)と島田氏屋敷跡(35)も戦国時代と推定されている居館跡で、堀や土塁跡が残っている。富田の不動寺(36)は鎌倉武士無動寺太郎館の、富田堀の内(37)も丹党富田氏の館比定地である。折原の堀の内(38)は丹党織原氏の館跡と推定されている。近世に入ると、釜伏峠には釜伏関所(39)が置かれ、通行人の取調べが行われた。

現在の国道254号線沿いには、古代では奈良時代の吉野廃寺(40)、末野窯跡群末期の窯である桜沢窯跡(41)、奈良から平安時代の集落である用土北沢遺跡(42)、甘粕山遺跡群(43)などが分布している。中世には、この道の東側に沿うように鎌倉街道上つ道が通っており、交通の要衝であった。花園町に所在する小前田氏館(44)と飯塚氏館(45)は鎌倉時代の館である。桜沢堀の内(46)は2町四方の大規模な館跡であり、丹党桜沢氏の館と見る意見と鉢形城の柵門跡と見る意見とがある。用土堀の内(47)は丹党用土氏の館跡と推定されている。猪俣小平六館(48)

は平安末の館跡といわれ堀跡が現存する。用土城(49)は藤田氏の居城で室町時代のものといわれている。藤田康邦が隠居したのもこの城という。美里町の広木城(50)、白石城(51)、猪俣城(52)はともに戦国時代の城郭で、児玉脇往還の軍事的重要性を示唆する立地である。

最後に、古墳の分布について触れておきたい。箱石古墳群に最も近いのは、藤田古墳群(53)であり、荒川左岸の1.25km下流側に位置する。右岸下流には立ヶ瀬古墳群(54)、上郷古墳群(55)、小園古墳群(56)などの後期古墳群が分布し、左岸下流では花園町の小前田古墳群(57)、黒田古墳群(58)が大規模な古墳群として知られる。ともに埴輪を有し、横穴式石室受容前後の6世紀代を造営の中心時期とする。国道254号線沿いでは用土古墳群があり、6世紀前半代の埴輪が出土している。北側の美里町内には古墳が多く、猪俣南古墳群(59)、同北古墳群(60)、普門寺古墳群(61)、羽黒山古墳群(62)、白石古墳群(63)、大仏古墳群(64)、中里天神山古墳群(65)、諏訪林古墳(66)、神明ヶ谷戸古墳(67)と枚挙に暇が無い。一部に前期の低墳丘古墳を含むが、横穴式石室を内部主体とし、埴輪を伴う古墳が多い。埴輪生産遺跡としては宇佐久保埴輪窯跡群(68)がある。

秩父郡では長瀬町野上下郷地区に散在する小円墳群(69)、本野上地区にあり、郡内でも皆野大塚に次ぐ規模を有する浅間山古墳(70)、長瀬地区では発掘調査によって横穴式石室の検出された上長瀬古墳群(71)、皆野町金崎地区では開口する横穴式石室墳が群在する金崎古墳群(72)があり、7世紀初頭とされる大塚3号墳からは末野窯跡群産と推定される供献用須恵器が出土している。同古墳群に属する天神山古墳(73)は秩父郡内で埴輪を伴うことが確実な唯一の古墳である。長瀬を中心とする秩父地方北部は荒川の緑泥片岩を下流域に供給した反面、横穴式石室や埴輪には児玉地方の影響が強く、秩父往還ルートとは別に、峠越えの道を利用した最短距離での児玉地方との往来が活発であった可能性がある。

### III 遺跡の概要

箱石遺跡は大里郡寄居町大字末野字下日山1482-1番地に所在する。平成5年度に一部の調査が行われており、その成果は第211集『城見上・末野・花園城・箱石』として刊行されている。今回報告するのは第2・4次調査分である。

今回の調査区は国道140号線南側に当たり、国道に沿う三角形の調査区とその南側の南北に細長い調査区に分かれているので、便宜的に前者をM-1区、後者をM-2区と呼称することにしたい。確認面の標高は平均106m前後であるが、北から南に向かってわずかに傾斜している。地形的には東流する荒川によって形成された河岸段丘上に立地するが、第1次調査区より一段低い第二河岸段丘上に位置し、調査区の南側約15mで急峻な崖線を形成している。表土下には細礫を含んだ黒色土が広がるが、遺構確認面はそのさらに下位の二次堆積ローム及び礫層である。

発見された遺構は縄文時代の住居跡2軒、古墳跡5基、平安時代の住居跡3軒及び同時期の須恵器窯跡1基、中世に属すると思われる溝5条・井戸1基のほか、縄文時代の土壙2基、平安時代の集積土壙2基、中世以降と推定される石敷き列1条、中世の土壙1基、時期不明の土壙10基・ピット5基である。

縄文時代の住居跡2軒のうち第4号住居跡は、東側約三分の一を古墳の周溝によって壊されており、確認できた掘り込みも数cmと浅かったが、床面直上より中期末の土器や石器が多量に出土し、炉跡や柱穴も検出された。第5号住居跡は片岩を不整形に敷き詰めた、いわゆる「敷石住居」と呼ばれる住居跡である。攪乱で破壊された部分も多くて壁面も遺存しておらず、その形態を把握するに至らなかったが、炉跡と石敷き下のピットが検出された。わずかに出土した土器片より縄文時代後期初頭の時期と考えられる。

古墳跡は5基が検出されたが、いずれも周溝の一部が調査区に掛かったのみで主体部は確認できなかった。

周溝は幅4m前後、深さ1m前後で、円形を呈するが、1号墳では南側、2号墳では北側が途切れており、陸橋部（ブリッジ部）となる。周溝内径は15~20m、外径では20~30mほどに復原できよう。また、第1号墳からは多量の、第4号墳からも少量の埴輪破片が出土しており、6世紀後半段階の古墳と思われる。他の4基からは埴輪が検出されていないが、第2・3号墳からは須恵器が出土している。

なお、第6号墳は攪乱がひどく、遺物も皆無であったが、第5次調査において、その北側隣接部分が良好な状態で検出され、多量の埴輪を伴っていることが判明した。

平安時代の遺構として着目されるのは、第1号墳北側で発見された須恵器の窯跡である。須恵器の窯（登り窯）は、通常山の斜面などを利用して造られるが、本遺構は、古墳周溝内の斜面部分を利用した特徴的なものである。また、窯体の最大幅1.38m、長さ4.38mと、規模的にはかなり小型である。時期的には末野窯跡群の後期に相当し、当時の須恵器生産の形態を示唆する貴重な発見例といえよう。窯体内部と灰原からは須恵器皿を中心として、坏、高台付碗、鉢、甕等と瓦の破片が多量に出土している。南東に3mほど離れて所在する集積土壙は直径2mほどの円形の平面プランをもつ。拳大ないし人頭大の河原石の下部から多量の須恵器坏と高台付碗が出土した。焼成失敗品と築窯時に出土した礫を廃棄した土壙の可能性が高い。土層断面から今回検出した須恵器窯より新しいものである。

平安時代の住居跡は2区の南部に集中して3軒が検出されたが、このうち第2号住居跡からは北側と東側に付く2基のカマドのほか「粘土貯蔵穴」や「ロクロピット」と思われる掘り込みが検出されており、須恵器工房跡の可能性もある。

中世に属する遺構としては、溝と井戸がある。溝は5条検出されており、このうち第3号溝と第4号溝は

第4図 箱石遺跡全体測量図

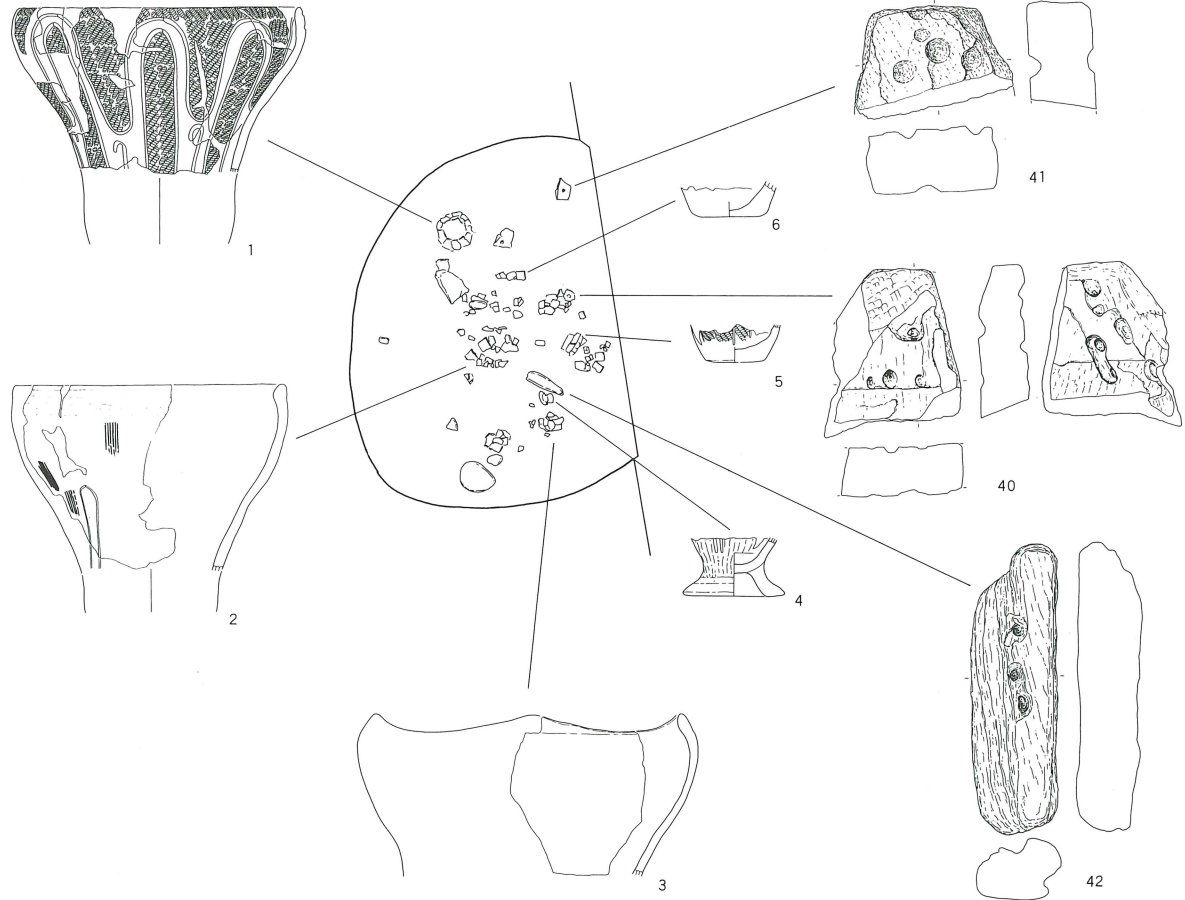
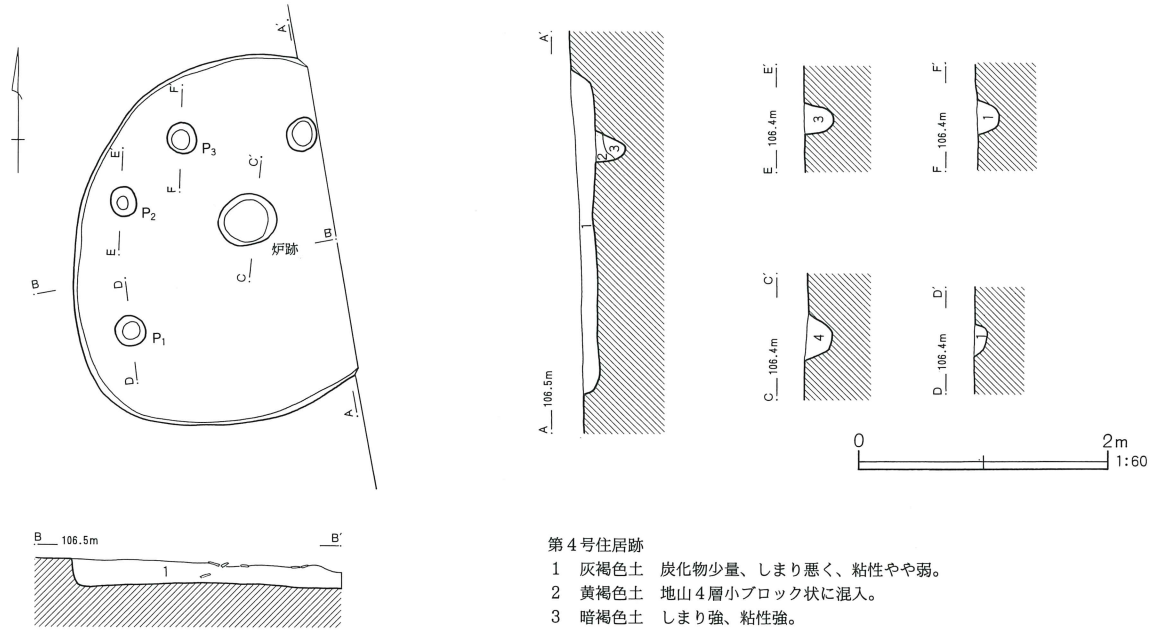


幅3m弱、深さ1m前後とほぼ同規模の薬研堀で、同一の遺構であろう。したがって、中世居館の外郭部をなす方形区画溝となる可能性が高い。コーナー推定部から南北方向の1辺が84m以上となるので、かなり大規模なものといえよう。出土遺物には内耳鍋形土器や播鉢などがあり、中世後期に所属しよう。また、井戸跡からは土器片とともに、焼土塊が廃棄されたような状態で検出された。土器片は区画溝のものと共通するので、居館に伴う井戸とみてよいだろう。

石敷き列(SX1)は、幅80cm程に細長く礫を敷き詰めたもので、南北に10m程検出された。用途は建物の雨落とし遺構である可能性が第一に考えられるが、確認が得られていない。使用している石材としては、片岩の敷設率が高い点が注意される。



第5図 第4号住居跡・遺物分布図



## IV 遺構と遺物

### 1. 縄文時代の遺構と遺物

箱石遺跡で検出された縄文時代の遺構は、住居跡2軒と土壙2基で、遺構は調査区の中央部から北側で検出された。遺跡の概要で既に触れたように、箱石遺跡からは、古墳群や古代の遺構が検出されたことから、後世に破壊された可能性も否定できないであろう。箱石遺跡の下流に存在する樋ノ下遺跡は、敷石住居跡を主体とする縄文時代後期の集落であるが、立地や景観に類似した点があることも考慮すべきと考える。

県道広木折原線の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書は、一部がすでに刊行されている。縄文時代に関しては、城見上遺跡で前期の遺構・遺物が発見されていることから、時期が下るにつれて、集落も現荒川寄りの段丘面に占地を移していったものと考えられる。

#### (1) 住居跡

##### 第4号住居跡(第5図)

第4号住居跡は、調査区のはほぼ中央部C-4グリッドで検出された。住居の東側が1号墳の周溝によって破壊されているが、現存部分から推定すると、長径3.2m×短径2.7mの楕円形を呈する住居跡であったと考えられる。

確認面から床面までの深さは0.2mで、壁は垂直に掘り込まれていた。床面はほぼ平坦である。床面の中央からやや北東壁寄りに地床炉が検出された。炉は径が0.4~0.45mの楕円形で、深さが0.2mである。覆土は焼土ブロックを多量に含む赤褐色土の1層で、覆土内から遺物は出土していない。

壁から0.2m~0.3m内側には、壁と平行して柱穴が廻っている。柱穴は、径が0.3m程度で、深さが0.1m~0.3mと比較的浅い。確認された柱穴は4個で、住居の南東側では柱穴を検出することは出来なかった。このような平面形態も、縄文中期末の典型例といえるであろう。

第5図に示すように、遺物は床面から出土しており、器形判別可能な3個体と石器類などで、遺構の遺存状

態からすると比較的まとまった出土状態といえる。遺物の出土状況は、柱穴の内側に集中しており、柱穴から壁の間では、ほとんど出土していない。このような出土状況は、敷石住居に特徴的に見られるもので、壁と柱穴間が住居使用時に既に埋められていた可能性も考えられる。

住居からは、器形が判る3個体の深鉢形土器を始め、土器片も多く出土した。攪乱を受けてはいるものの、残存部分の出土状態は、極めて一括性が高いものと考えられる。出土土器は全体に著しく風化が進んでおり、細部に亘る観察が困難な個体が多かった。

第6図1はP3直上で出土した深鉢形土器で、文様構成がわかる唯一の資料である。胴上部が強く張り、口唇端部がやや内湾気味のキャリパー形を呈する。

文様構成は、八単位の波状沈線文と逆「U」字状懸垂文の組み合わせからなる、胴部一帯の土器で、空白部には蕨手状沈線文を施文している。

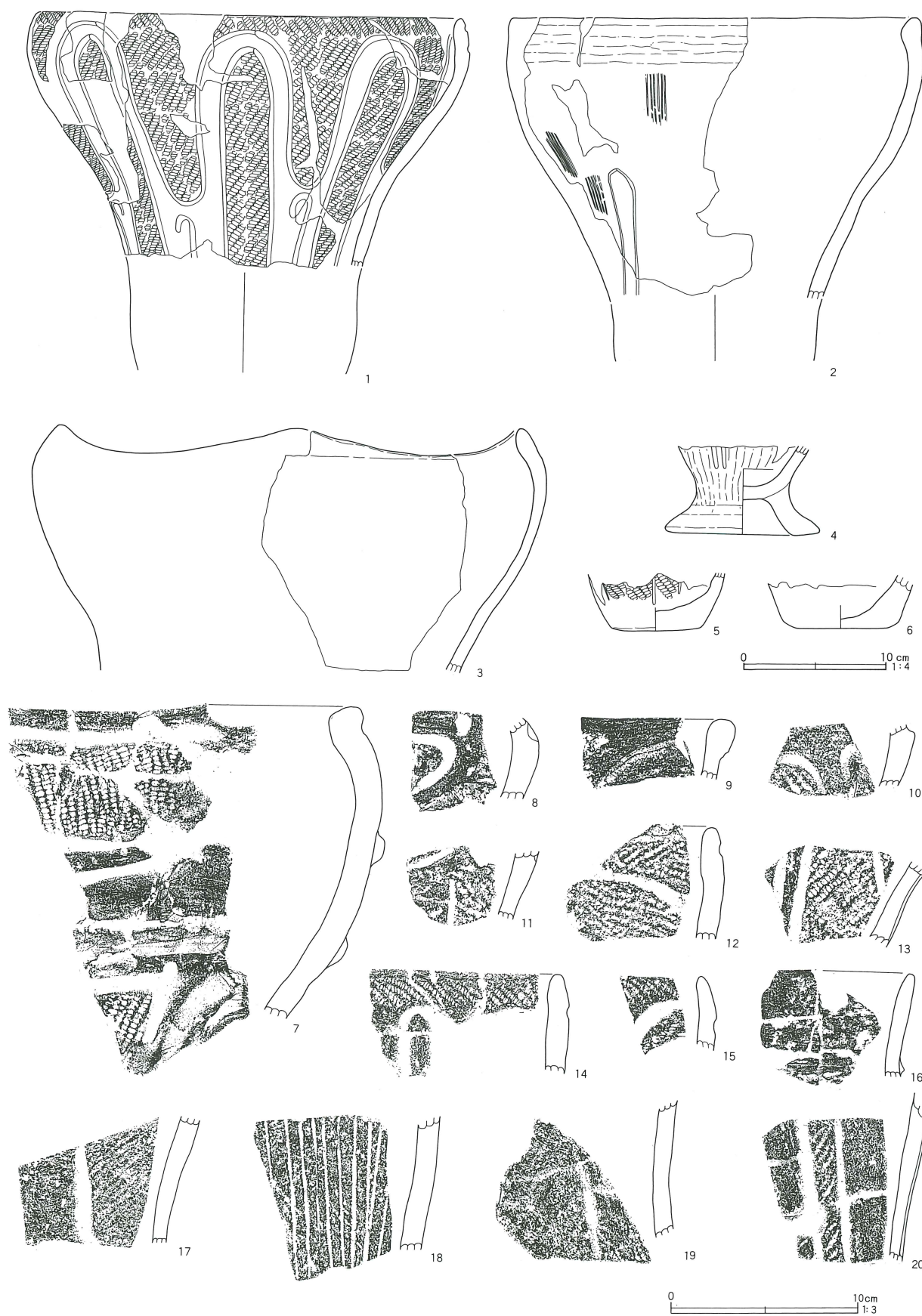
縄文原体はRL単節で、口唇部に横、胴部に縦施文することで矢羽根状の施文効果をもたらしている。施文順序は、縄文施文後に沈線文を描き、空白部を磨り消し処理した後に、蕨手状沈線文を施文している。口径22.4cm、現存高10cmである。

同図2は炉の南西側から出土した土器で、破片から器形復原した。器形・分量ともに同図1と同様のキャリパー形であるが、風化が著しく、文様構成の詳細が不明である。残存部位からみて、口唇部が無文で、胴下部に幅狭い逆「U」字状懸垂文が施文されるものと思われる。遺存部分から、地文は櫛歯状工具による条線が施されていたものと推定される。第7図26はこの個体の胴部破片の可能性が有る。口径21.8cm、現存高14cmである。

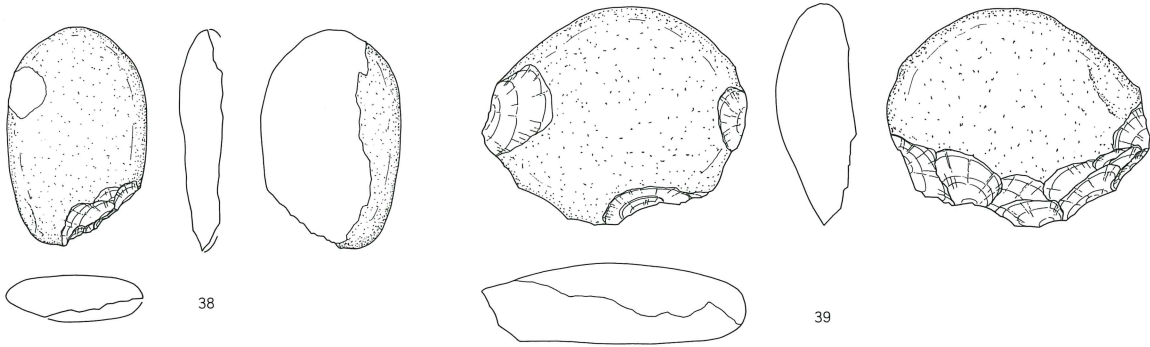
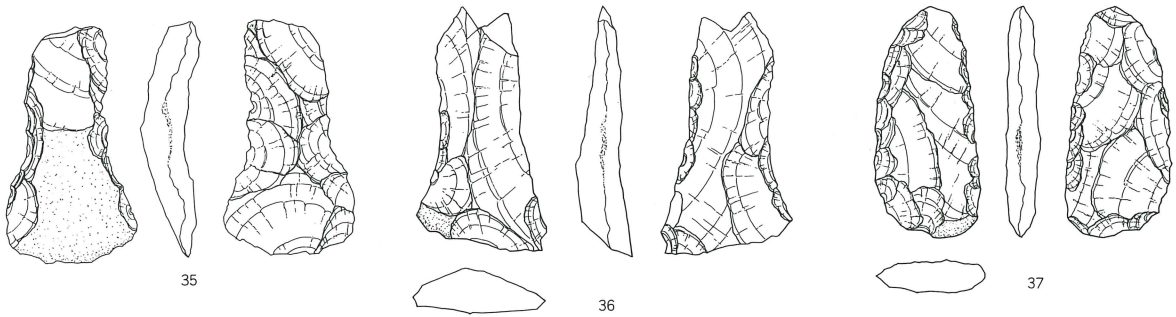
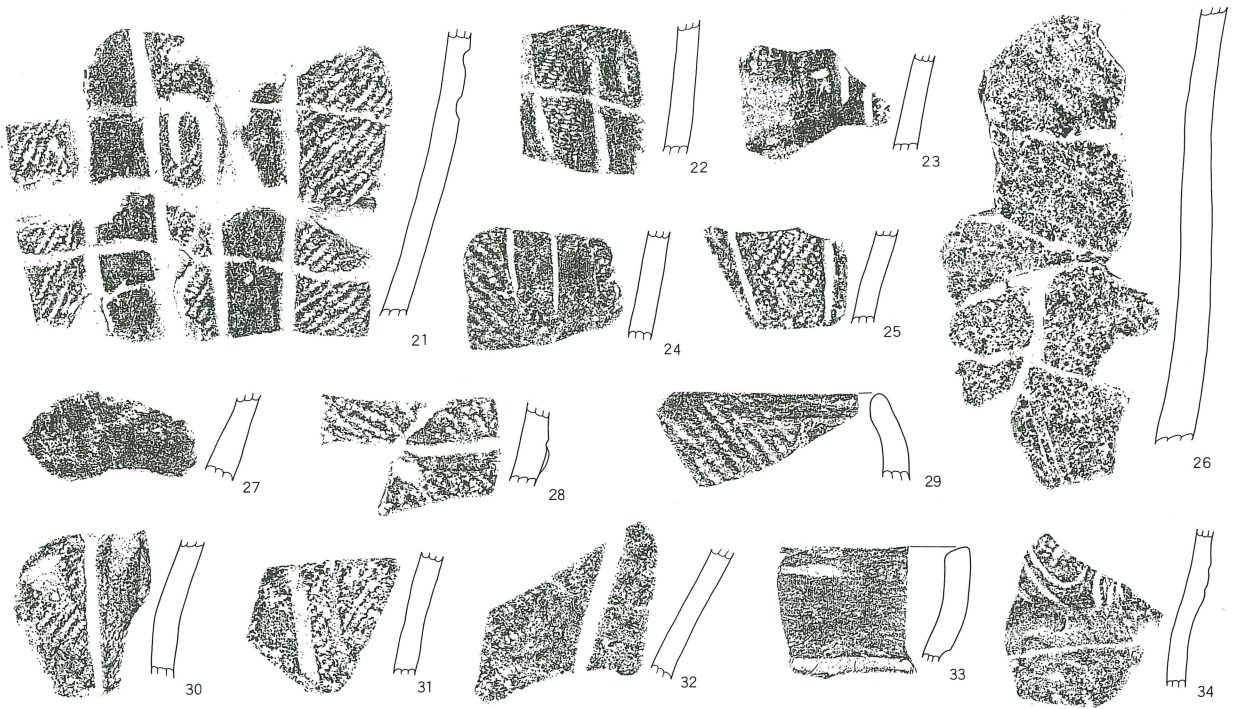
同図3は4単位波状口縁で無文の深鉢形土器である。破片からの器形復原をしたもので、推定口径25cm、現存高13cmである。器面調整等の詳細は不明。

同図4~6に底部破片を一括した。4は台付き土器

第6图 第4号住居迹出土遗物(1)

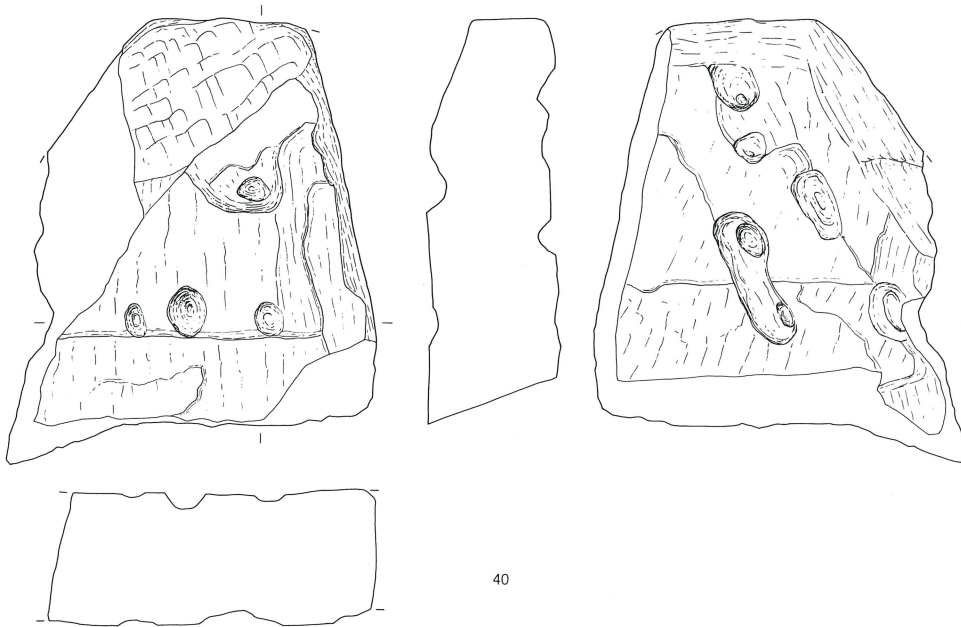


第7图 第4号住居跡出土遺物(2)

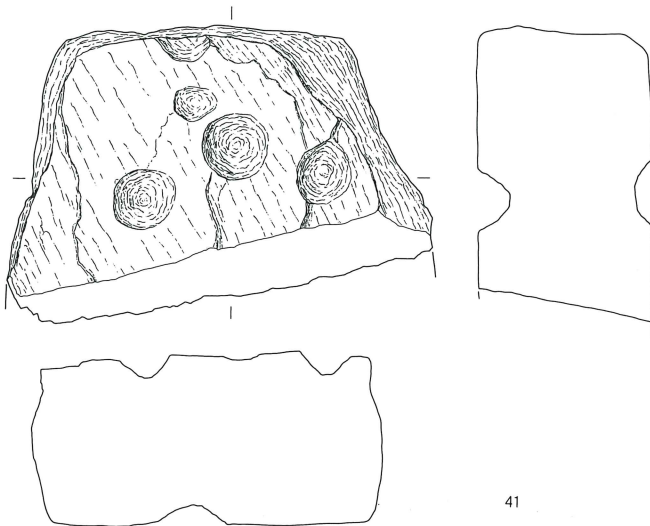


0 10cm 1:3

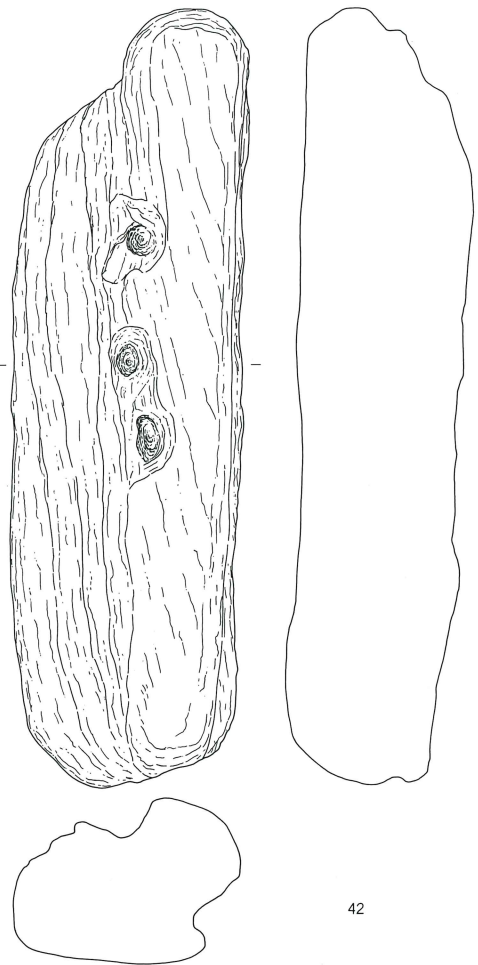
第8図 第4号住居跡出土遺物(3)



40



41



42



で、底径は8cmである。底部直上に二条の懸垂文が観察される。5は懸垂文と縄文施文の底部である。

同図7～第7図34に、本住居跡から出土した破片を一括した。7～11は、口縁部が隆帯による楕円形ないしは杵状の区画文を持つ土器群である。概して隆帯装飾の傾向が薄れ、沈線が文様装飾を主導した土器で、隆帯も扁平化する傾向が窺える。

7は口縁部と胴部文様帯で構成され、無文の頸部を挟んで、胴部には2本隆帯による渦巻き文が認められる。隆帯間・隆帯両側には沈線が添えられ、この部分の隆帯は断面が三角形に近い。

同図14～15、17、19は1と同様の文様構成をもつと思われる胴部破片である。16は無文の外反する口縁部で、隆帯区画されることから、或いは両耳壺であろうか。18は単沈線が垂下する曾利系の土器である

第9図 第5号住居跡・出土遺物

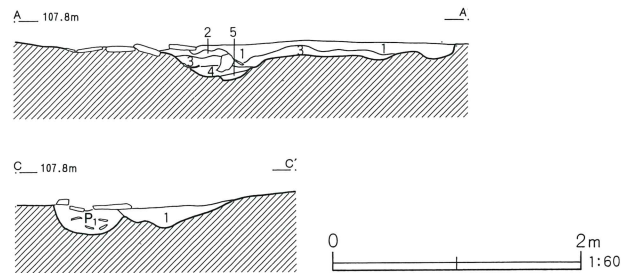
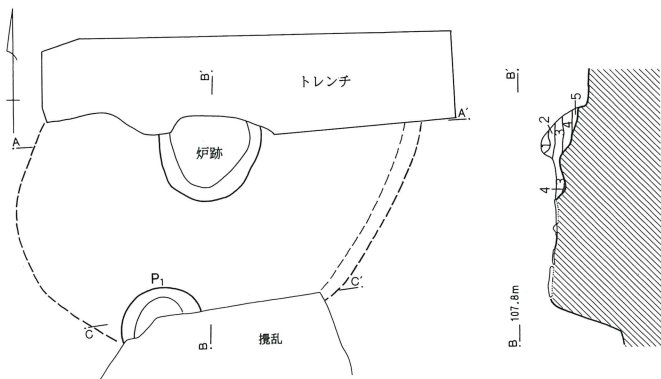
う。

第7図21は、懸垂文の一部に、上下対向の蕨手状沈線文が配された胴部破片である。第6図1とは異なり、口縁部文様帯系の土器の可能性が考えられる。同図34は磨り消し連弧文系の土器であろう。この類は掲載した1点のみである。

第7図35～第8図42に石器を一括した。35～37は打製石斧で、小型である。35は基部、36は基部と刃部が欠損している。

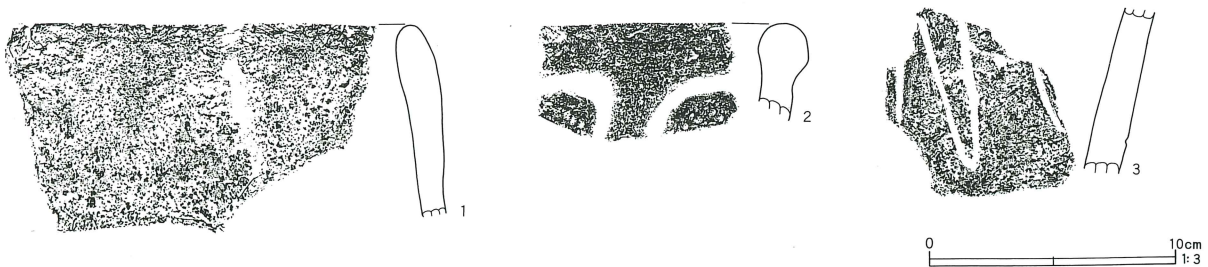
同図38～39は礫器である。38は片面が欠損するが、端部にのみ粗い剥離が施されたもの、39は両面に剥離が施されている。両例ともに刃部の磨耗は観察されない。

第8図40～42は窪石である。40～41のように、両面に多数の窪みをもつ板状の石材を用いたものと、



第5号住居跡

- 1 カクラン土 細石多量。
- 2 黒褐色土 白色微粒子極少量、しまり強、粘性やや強。
- 3 暗褐色土 白色微粒子多量、炭化物・焼土粒子極少量、しまり強、粘性弱。
- 4 暗褐色土 焼土ブロック多量、炭化物少量、しまりやや弱、粘性強。
- 5 暗赤褐色土 焼土主体、しまり強、粘性弱。



42のような片面に窪みを持つ棒状のものがある。いずれも磨耗痕がなく、石皿としての用途は考えられない。

#### 第5号住居跡（第9図）

第5号住居跡は、調査区北西端 A-1 グリッドで検出された敷石住居跡である。遺構の南北が攪乱を受けていたことや、掘り込みが確認できなかったことから、遺存状態が極めて悪く、主体部の全形や張り出し部の形態を確認できなかったが、箱石遺跡で検出された唯一の敷石住居跡である。

住居は掘り込みが確認できなかったために、敷石の状況からプランを推定した。これによると、現存部では、東西の径が約2.7mで、比較的小型の住居跡が想定される。敷石住居は、しばしば石が転用されたり、後世の攪乱などによって石が抜かれている例も多く存在することから、或いはもう少し大型の住居であったかもしれない。

床上に敷設されていた石材は扁平な結晶片岩を主体としている。この石材は遺跡周辺に産地が存在することから、樋ノ下遺跡でも多用されていた。

敷石は炉の東側では抜かれた形跡もあるが、炉の西側では隙間なく敷設されており、この部分では炉に接して敷設されていたほか、炉内に石が落ち込んだ状態であった。

炉跡は北半分が攪乱を受けて失われているが、現存部での径が0.9m、床面からの深さが0.2mである。炉内には大型の礫が落ち込んだ状態で見つかったことから、あるいは石囲い炉であった可能性も否定できない。

敷石面の写真・実測終了後に、敷石を除去したところ、敷石と掘り方との間に間層が確認された。石を平面に保つための埋土であろうか。

ピットも攪乱を受け、詳細が不明瞭である。ピットは敷石下面からの深さが0.2mと浅いが、炉跡周辺の床面中央部からピットに向かって、敷石下部が緩く傾斜していることが特徴で、この点は他の柄鏡形敷石住居跡にも認められる特徴である。主体部の敷石下部で検出された土層が確認されたことや、ピット上に明らか

かに石が敷かれていたことからみても、この住居が柄鏡形で、ピットは主体部と張り出し部の接続部に穿たれていた可能性が高いであろう。おそらく住居使用時には、ピットは敷石によって蓋をされた状態であったろう。

敷石を除去した後に周辺部を精査したが、柱穴や張り出し部を検出することができなかった。

第9図1～3が、5号住居跡出土土器である。出土量自体も少なく、器形復原可能な個体も出土せず、図示した以外は器面の風化が著しく、観察不能であった。

1は無文で、内傾する深鉢、2は或いは口縁部文様帯系と考えられる、太い沈線で文様描出される土器、3は細い鋸歯状沈線文の土器であるが、地文の有無は不明。1、3と住居形態から、縄文後期初頭に位置付けられよう。

## （2）土 壙

### 第14号土壙（第10図）

本土壙はD-14グリッドに位置する。規模は、径が約0.5mの円形で、確認面からの深さは0.06mと浅い土壙である。床面は平坦で、覆土は暗褐色土1層であった。覆土からは第10図1の縄文土器破片が1点出土したのみである。

第10図1は、断面カマボコ形の幅広い沈線が垂下する胴部破片である。風化が激しく、沈線間の地文の有無や整形は観察不能である。部位から、キャリパー形土器の胴部破片と推定されよう。

### 第15号土壙（第10図）

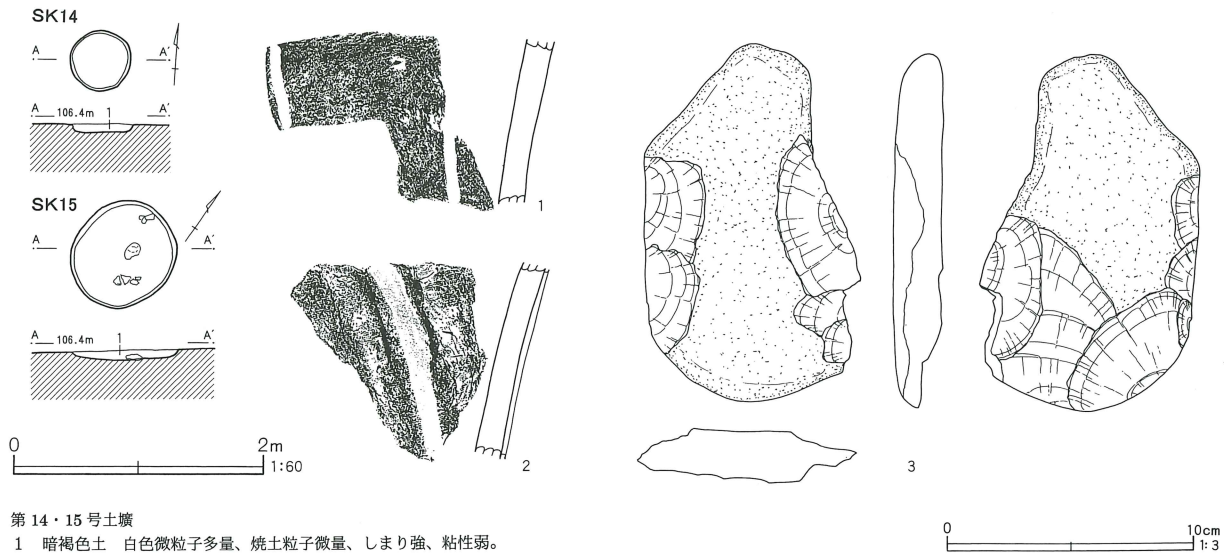
本土壙もD-14グリッドに位置し、両土壙は隣接している。規模は径が0.8m×0.95mの楕円形で、確認面からの深さは、最深部で0.1mと浅い土壙である。

覆土は14号土壙と同様に、暗褐色土1層である。床面上から土器破片と石器が出土した。

第10図2が、本土壙から出土した土器である。2本の隆帯で渦巻き状の文様が描かれる土器で、隆帯間、隆帯両側にはナヅリが加えられている。恐らく第4号住居跡出土の、第6図7と同様の土器であろう。

同図3が、本土壙から出土した石器である。扁平な

第10図 第14・15号土壙・出土遺物



第14・15号土壙

1 暗褐色土 白色微粒子多量、焼土粒子微量、しまり強、粘性弱。

河原石の両側縁に粗い剥離が施されたもので、一部に欠損が認められる。

(3) グリッド出土遺物

箱石遺跡グリッドからは、土器も出土しているが、風化が激しく掲載に耐えられないため、ここでは石器のみを図示した。

第11図から12図がグリッド出土石器である。1は礫器で、粗い剥離で刃部を作出している。基部剥離は刃部の作出を意図しておらず、剥離後の敲打痕が認められる。

2～7は打製石斧で、形状は2～3が撥形、4～5が分銅形、6～7は両頭石斧と呼称されるものであろう。2、6以外は片面に自然面を残し、全体に剥離が粗く、小型の石斧が多い。両側縁の中央部に敲打による刃潰し加工を持つ。

第11図8、第12図9は礫器として分類したが、8は大型の打製石斧の転用例とも考えられる。9は片面に自然面をもつ肉厚の礫器で、側縁には使用による磨耗痕が観察される。

第12図10は、箱石遺跡で出土した唯一の石皿である。欠損部位が多く形状が不明だが、恐らく楕円形を呈するものであろう。

第12図11～12は石鏃である。黒曜石製で剥離はやや粗い。

(4) 小 結

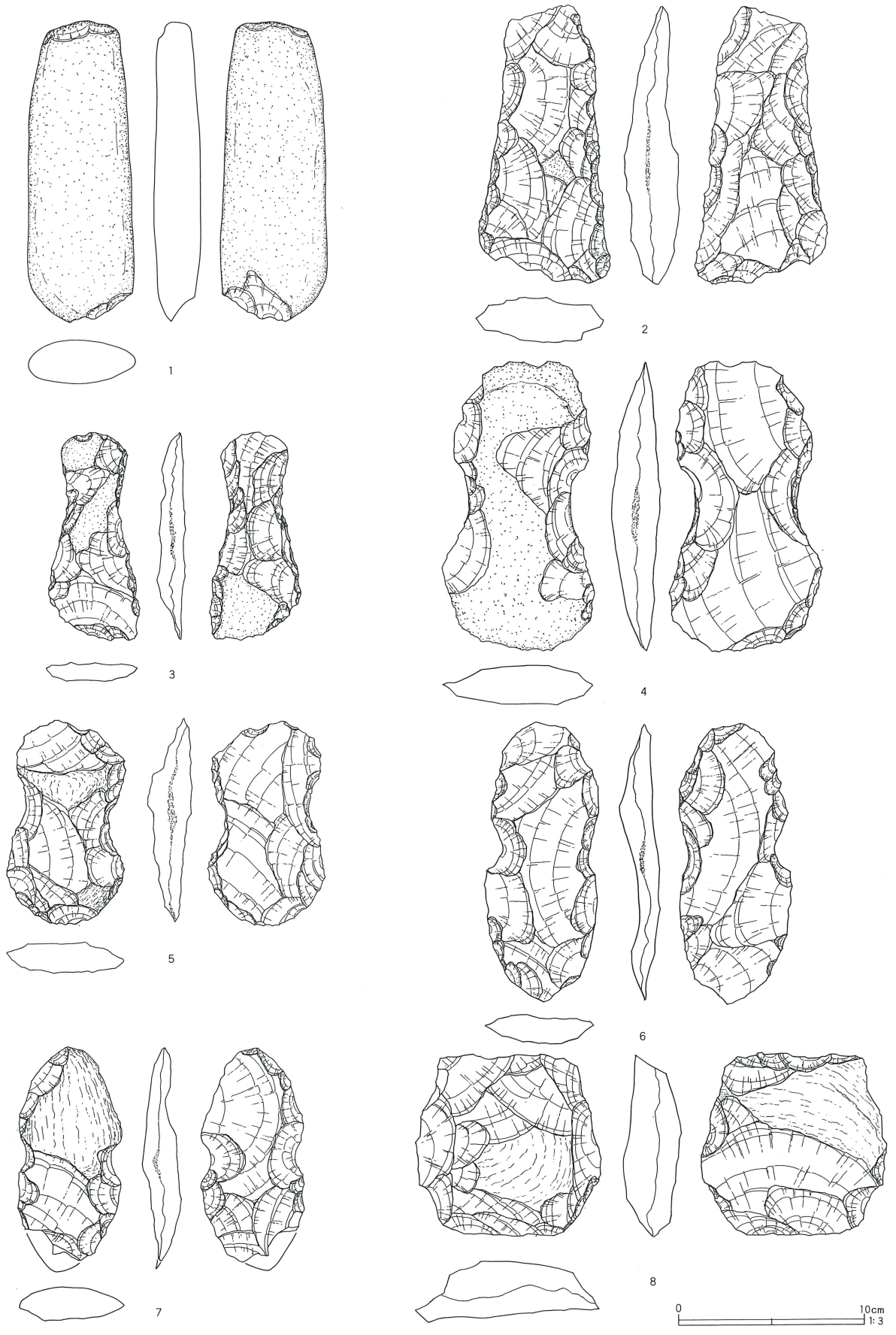
箱石遺跡で検出された2軒の住居跡のうち、4号住居跡から出土した土器群は、出土状況から見ても、一括性が高いものと思われる。このなかで、第6図1～3は、器形・文様構成などから見て、明らかに中期末に位置付けられるものであるが、これとともに、同図7～11のような、口縁部文様帯系の土器が伴っていることに注目したい。

口縁部文様帯系の土器には、11や第7図21例のように、明らかに懸垂文を基本としたものと、第6図7例のように、口縁部文様帯と胴部文様帯が分離し、胴部に渦巻き文が施文される、いわゆる梶山類とが存在する。また、この土器の口縁部の外湾傾向が1と酷似していることにも注意を払うべきであろう。

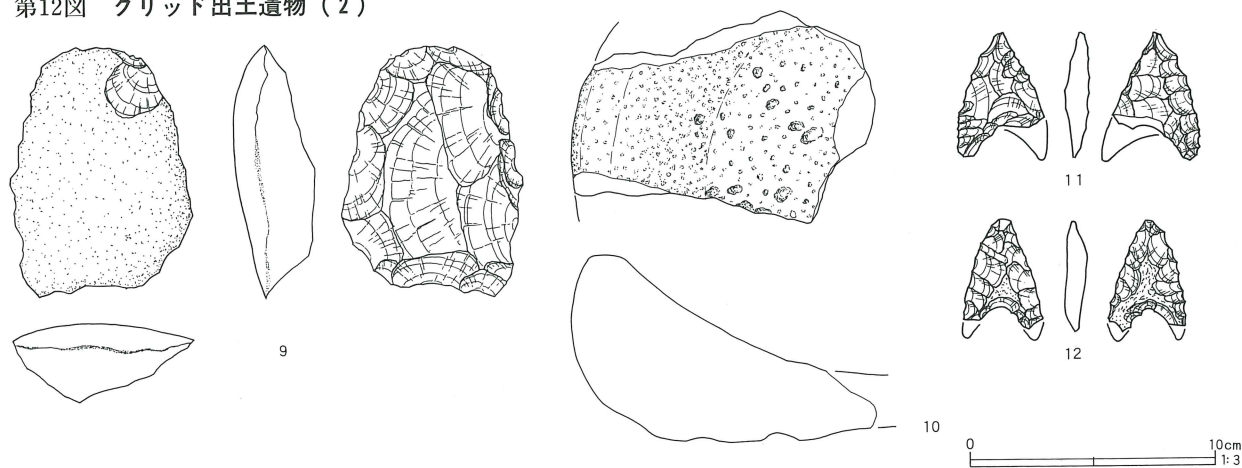
第6図1は、連弧文の変容が介在して成立した土器であり、従来、加曾利EⅢ式の基準として把握された土器である。この土器が成立する背景と、口縁部文様帯系の系譜とは、基本的な土器の変化系列が異なるものと考えられ、前者が出土する遺構には後者が少ない傾向や、その逆の事例も存在することから、この間には時間差を伴うとする解釈も存在する。しかしながら、箱石遺跡4号住居跡の組成をみると、胴部一帯系の土器と口縁部文様帯系の土器、梶山類或いは、第7図34の、磨り消しを伴う連弧文系の土器などを混在とみ



第11図 グリッド出土遺物(1)



第12図 グリッド出土遺物(2)



なす根拠は乏しく、これらが共存関係にあると見るほうが自然であろう。また、口縁部文様帯系、胴部渦巻き文系、胴部一帯系ともにこの時期以降も存在することが、宿東遺跡の分析からも明らかなように、称名寺式との間に、EIV式を独立して介在させることは、一括資料の検討を基準とする限り難しいであろう。

4号住居跡は、明らかに壁柱穴タイプであり、出土遺物から見ても矛盾はなく、この時期に出現する特徴的な形態である。

以上の点から、箱石遺跡4号住居跡は縄文中期末一加曾利EⅢ式一に位置付けられ、既報告資料に対応させるならば、宿東遺跡第5期、将監塚遺跡50号住居跡などに対比することができるであろう。

第5号住居跡は、遺構の遺存状況や出土遺物に恵まれなかったために、位置付けを明確にし得ない。宿東遺跡では、柄鏡形住居跡の出現に後続し、第9図3の土器が出現するようである。このことからすると、5号住居跡も、後期最初頭に位置付けることは難しいと考えられる。一先ず可能性を提示し、機会を待って再検討したいと考える。

- 石塚和則 1986『将監塚—縄文時代—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第63集  
 細田 勝 他 1994『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第135集  
 細田 勝 渡辺清志 1998『宿東遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第197集

石器観察表 (第7・8・10~12図)

番号	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
第7図35	打製石斧	砂岩	9.4	5.2	1.8	90.0	S J 5
第7図36	打製石斧	砂岩	9.9	4.9	1.7	70.0	S J 5
第7図37	打製石斧	砂岩	9.0	4.1	1.3	70.0	S J 5
第7図38	礫器	ホルンフェルス	8.8	5.5	1.9	100.0	S J 5
第7図39	礫器	ホルンフェルス	8.8	10.5	3.0	350.0	S J 5
第8図40	窪石	結晶片岩	16.0	14.0	4.9	2.05kg	S J 5 No.3、両面に窪みあり
第8図41	窪石	結晶片岩	11.6	17.0	6.9	1.8kg	S J 5 No.2、両面に窪みあり
第8図42	窪石	結晶片岩	30.6	9.1	6.6	2.4kg	S J 5 No.27
第10図3	礫器	砂岩	14.0	8.5	1.9	280.0	S K15No.2
第11図1	礫器	緑泥片岩	15.7	5.3	2.5	420.0	S D 3
第11図2	打製石斧	ホルンフェルス	14.7	6.6	2.8	310.0	S J 2
第11図3	打製石斧	ホルンフェルス	10.8	4.5	1.4	80.0	1区北中下層
第11図4	打製石斧	砂岩	15.2	7.6	2.5	360.0	S C 1
第11図5	打製石斧	ホルンフェルス	10.6	6.1	2.2	200.0	S C 1 No.48
第11図6	打製石斧	ホルンフェルス	14.5	5.7	1.8	210.0	中央部確認面
第11図7	打製石斧	ホルンフェルス	11.2	5.3	1.8	140.0	S D 3 No.2
第11図8	礫器	ホルンフェルス	9.7	9.7	2.7	370.0	S J 4
第12図9	礫器	ホルンフェルス	10.0	7.0	3.2	203.0	S S 4
第12図10	石皿	安山岩	12.0	8.0	4.9	350.0	S S 1、裏面は凹石として使用
第12図11	石鏃	黒曜石	2.5	1.6	0.5	1.2	
第12図12	石鏃	黒曜石	2.2	1.5	0.4	1.0	

## 2. 古墳時代の遺構と遺物

### (1) 古墳跡

#### 第1号墳 (第13図)

C・D-4・5・6・7グリッドに位置する。墳丘は完全に削平されており、周溝のみが残存していた。遺構は調査区外に延びており、全体の30パーセントほどの調査である。周溝の幅は4.80~6.88m、地山面からの深さは1.52mで、断面形は逆台形である。溝底の断面は水平ではなく、外側立上り部下場が最も深く、約5度の傾斜で墳丘側に向かって浅くなっている。立上り部の傾斜は内外とも約30度である。

覆土の上部には平安・中世の遺物を含む暗灰褐色粘性土が乗っており、周溝の完全埋没は中世以降となろう。周溝の覆土は上層が埴輪片を多量に含む暗茶褐色粘土、中層が埴輪片を多量に含む茶褐色粘土、下層はいくつかに分層されるが、暗黄褐色系の粘土で、埴輪片を少量含んでいた。このことから、墳丘に立てられた埴輪は早くから一部が周溝内に転落し始めたが、大部分は溝が埋まるのと同時に堆積したことがわかる。

平面形は円形に復原され、その内径は23.36m、外径は33.60mである。南西側では周溝が途切れて、陸橋部となるが、対になる端部が調査範囲内で確認されていないことに疑問が残る。陸橋部幅の計算値は12.40m以上となり、広きに失する感がある。また、陸橋部の北側では周溝内側ラインが2.40mほど復原円よりも外側に飛び出している。

第2号墳とは4.4mの間隔、第3号墳とは5.2mの間隔で近接している。

外側の立上り部を第1号窯が、内側の立上り部を第1号集積土壙が切っている。また、1号窯の灰原は周溝内の窪みを利用している。築窯時点では周溝は埋まりきっておらず、その窪地を意識的に利用したものと考えられる。

出土遺物には合計60.01kgの埴輪片がある。

#### 円筒埴輪

原位置での出土はない。周溝覆土からの出土資料(第14図)と、その他の遺構からの出土資料に分け

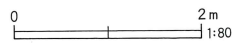
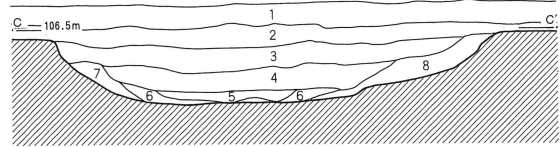
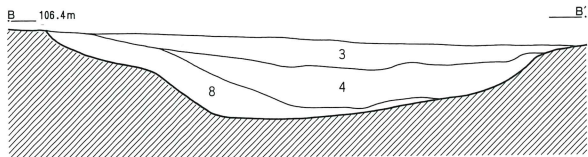
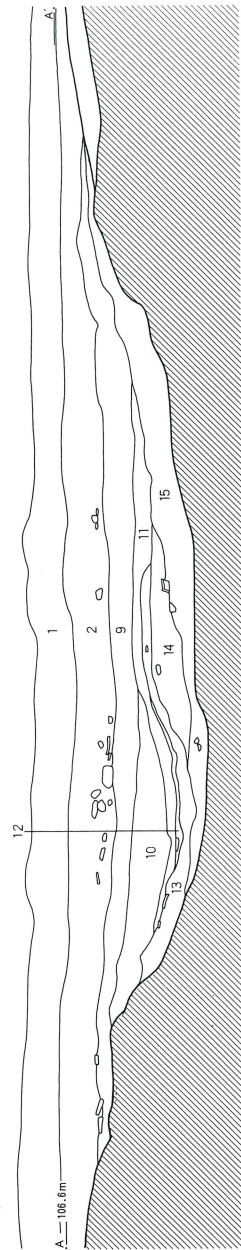
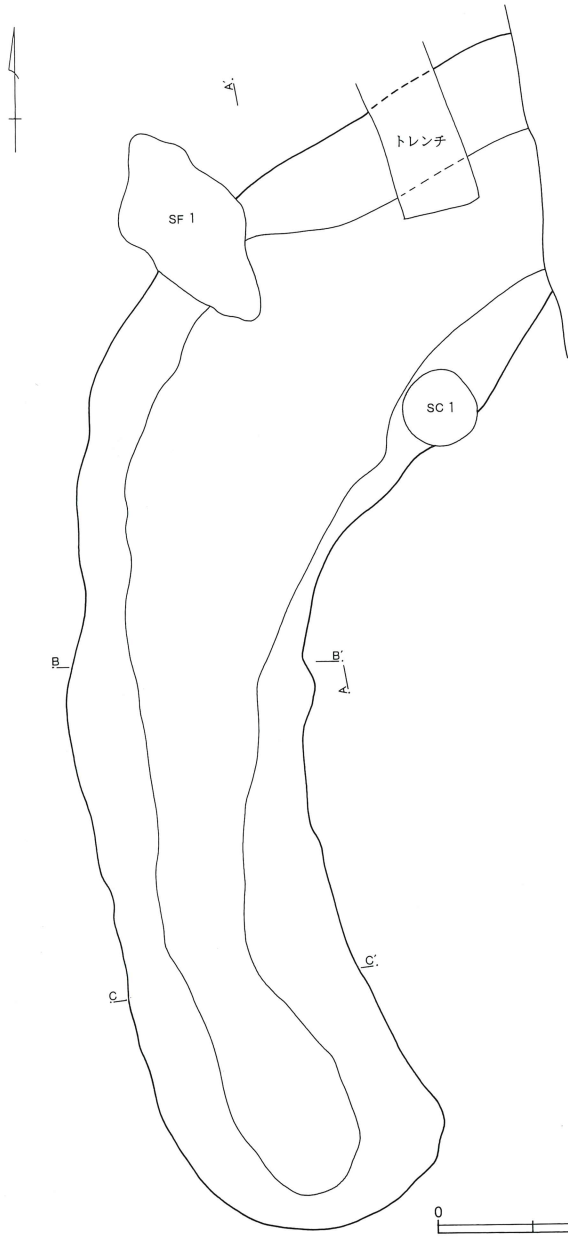
て報告する。後者は1号窯灰原及び1号集積土壙からの出土であるが、共に1号墳周溝内の遺構であり、混入したとみて誤りないであろう。

全体を通して胎土・焼成・色調についてまとめると、まず、粘土に粗砂及び最大径10mmほどの細礫の含有が多い。主要鉱物は石英、チャート、結晶片岩、雲母粒、白色パミス、酸化鉄粒などである。その組成は荒川上~中流域の組成と一致し、箱石遺跡付近に埴輪生産遺跡が存在していた可能性が高いであろう。焼成は粉っぽく、やや軟質な個体の割合が高く、須恵質のものではなかった。しかし、黒斑を有するものはなく、軟質ながら器肉が灰色を呈するものも多いので、還元がかかった焼成であり、窖窯焼成品とみてよい。色調は明赤褐色を基調とし、橙色、くすんだ赤褐色が少量ある。

第14図1~5は円筒埴輪の口縁部である。外反しながら開く器形をとり、端部はヨコナデされている。外面は斜め気味のタテハケ調整、内面は縦位の指ナデの後に緩い傾斜のナナメハケ調整が施されている。残存率の比較的高い1での推定口径は20cm前後となり、かなりの小型品といえる。したがって、口唇部も薄く、6~7mm程度である。2はやや厚く、断面の形状も異なるので朝顔形とみた方がよいであろう。口縁部の高さは1では7cm前後と短い。なお、5の外面にはヘラ描きの斜線があり、いわゆる窯印の可能性はある。

第14図6~9と第15図1~3は中間の段であり、透孔の一部が残るものがある。透孔は円形であり、刀子削り後に指ナデを加えている。直径4~5cm程度の小型のものになろう。外面調整はタテハケ、内面調整は深くえぐれた縦位の指ナデである。内面には粘土紐の巻上げ痕が明瞭に残るもの(第15図7・8)がある。凸帯は断面形が台形で幅の狭いもの(第14図7、第15図1・3)と断面M字形で突出度の低いもの(第14図6・8・10・11・13)とがある。凸帯貼付後のヨコナデは比較的丁寧である。残存率の高い第15図8では胴部径15cm、中間段の高さは8cm+ $\alpha$ である。

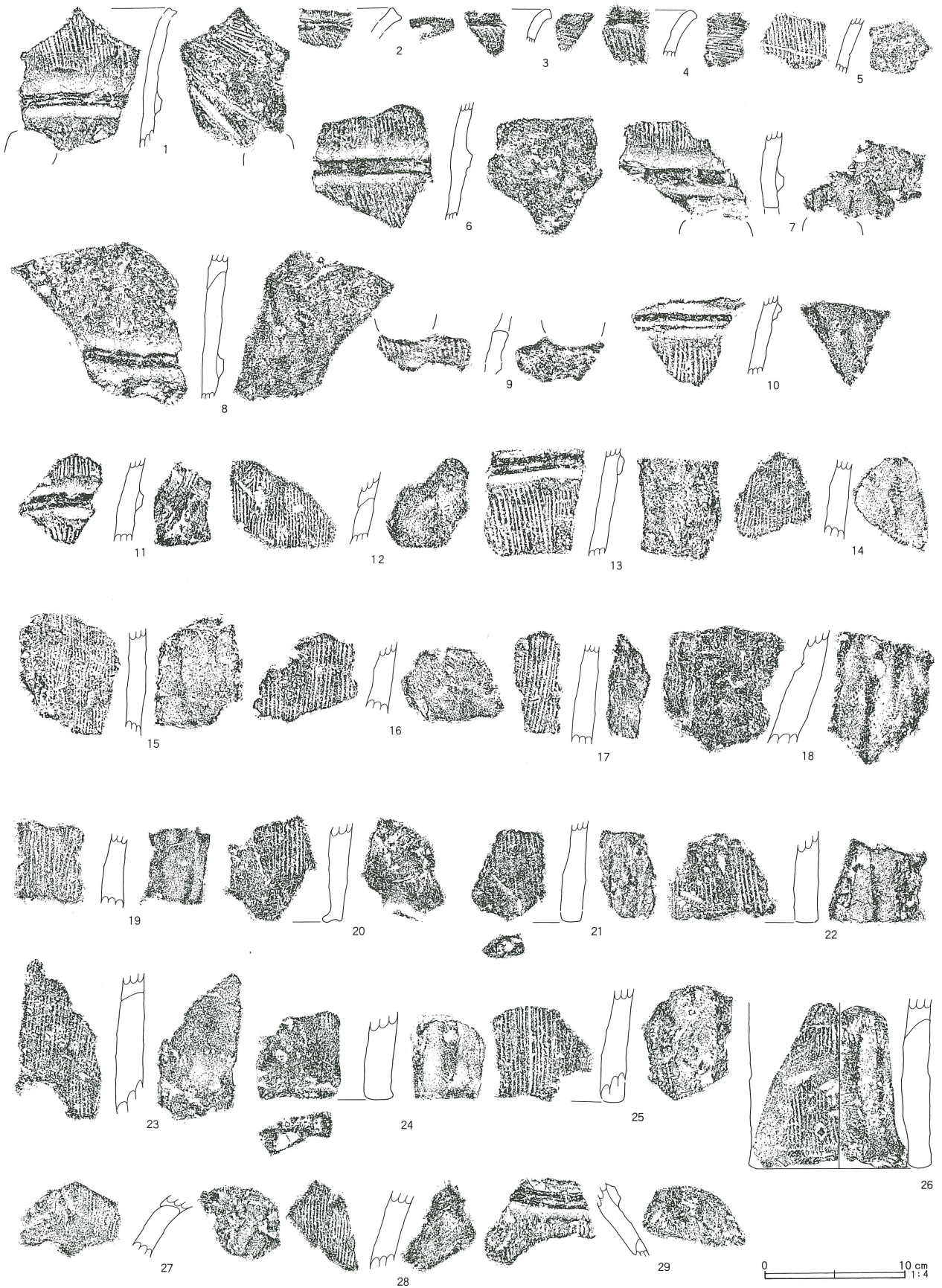
第13図 第1号墳周溝



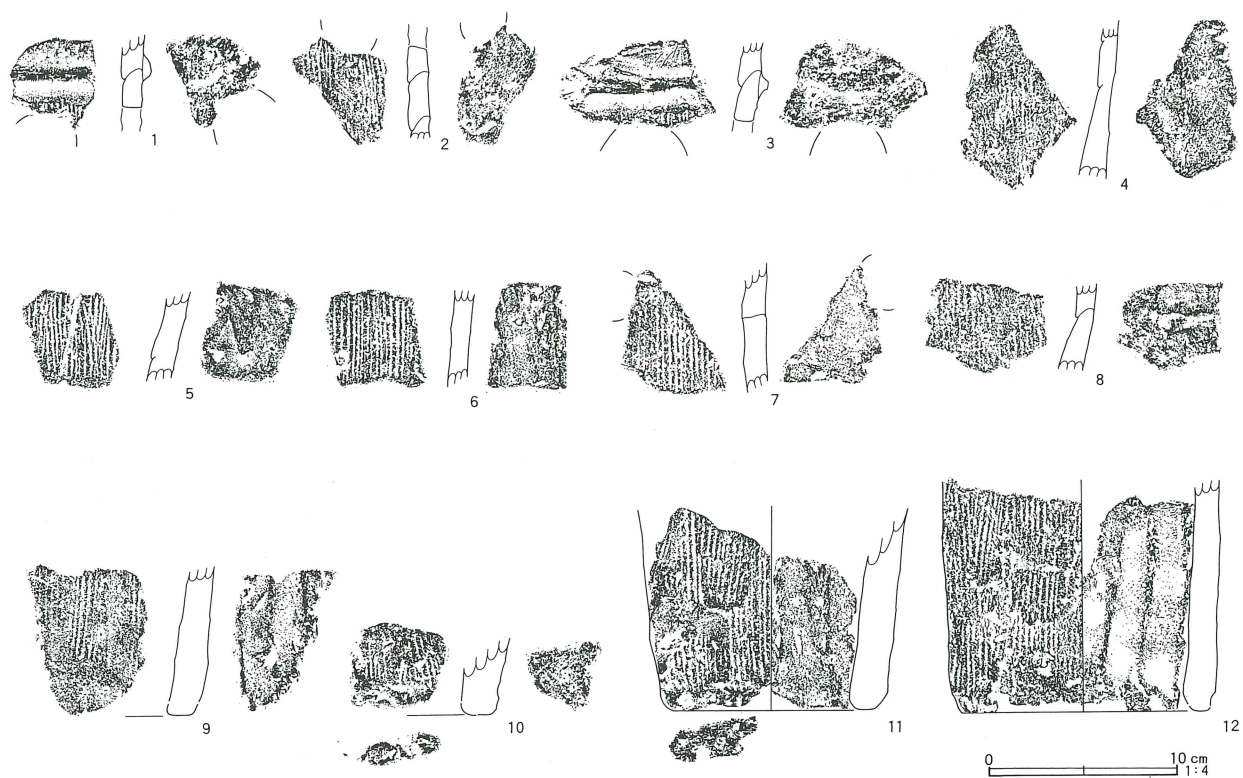
第1号墳周溝

- 1 暗灰褐色土 小礫多量、粒子極粗く、粘性強。(表土層)
- 2 暗灰褐色土 炭化物・焼土多量、1層より暗く、粒子粗い、粘性強。(土器片含む)
- 3 暗茶褐色土 粒子細かく、粘性極強。(埴輪片多量)
- 4 茶褐色土 粒子細かく、粘性極強。(埴輪片多量)
- 5 暗茶褐色土 粒子細かく、粘性極強。
- 6 茶褐色土 粒子細かく、粘性強。
- 7 暗黄褐色土 粒子細かく、粘性極強。
- 8 暗黄褐色土 粒子細かく、粘性極強。(小礫・埴輪片含む)
- 9 黒褐色土 粒子粗く、粘性極強。(土器片含む) 1号窯灰原覆土。
- 10 褐色土 炭化物・焼土・土器片多量、粒子粗く、粘性強。1号窯灰原覆土。
- 11 黒色土 炭化物多量、粘性極強。炭化物層。1号窯灰原覆土。
- 12 赤褐色土 しまり強。(窯壁含む) 1号窯灰原覆土。
- 13 黒色土 炭化物・焼土多量。1号窯灰原覆土。
- 14 黄褐色土 フカフカの土層。
- 15 暗褐色土 粘性極強。(埴輪片含む)

第14图 第1号墳周溝出土遺物(1)



第15図 第1号墳周溝出土遺物(2)



1号墳周溝出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整 本/cm	内面調整 本/cm	備考
1	円筒埴輪	BCEGHJ	II	2.5YR5/6	15	縦ハケ 9/2.2	斜ハケ 6/1.3	中間段に円形透孔 胴径18.0cm
2	円筒埴輪	BEGHI	I	5YR4/6	5	縦ハケ 5/1.1	横ハケ	朝顔の可能性
3	円筒埴輪	ABEGH	II	5YR4/8	5	縦ハケ 7/1.6	横ハケ	
4	円筒埴輪	ABEGIJ	II	5YR5/6	5	縦ハケ 8/2.4	横ハケ 5/1.3	
5	円筒埴輪	ABEGHJ	II	5YR4/8	10	縦ハケ 9/2.1	剥離	外面へラ描窠印(斜線)
6	円筒埴輪	ABEGJK	I	2.5YR5/6	15	縦ハケ 7/1.9	縦位指ナデ	凸帯不等低台形 胴径9.0cm
7	円筒埴輪	BCEGHIJK	I	2.5YR5/6	13	縦ハケ 7/1.7	縦位指ナデ	円形透孔 胴径16.0cm
8	円筒埴輪	BEGHJK	II	5YR5/6	25	磨耗	縦位指ナデ	胴径15.0cm
9	円筒埴輪	BGHJ	II	2.5YR5/8	15	縦ハケ 7/1.9	斜ハケ+ナデ	円形透孔は刀子穿孔後指ナデ
10	円筒埴輪	BEGJK	I	2.5YR5/6	15	縦ハケ 6/1.7	縦位指ナデ	凸帯下稜の低いM字形
11	円筒埴輪	BEGHJ	I	2.5YR4/8	10	縦ハケ	縦ハケ+縦位指ナデ	
12	円筒埴輪	ABEGJK	III	7.5YR5/4	10	縦ハケ 10/2.1	縦位指ナデ	径13.0cm
13	円筒埴輪	ABCEGJK	I	2.5YR5/8	20	縦ハケ 11/3.2	縦位指ナデ	凸帯M字形 胴径13.0cm
14	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	10	縦ハケ 6/1.4	縦位指ナデ	
15	円筒埴輪	ABEGIJK	II	5YR5/6	20	縦ハケ 6/1.2	縦位指ナデ	径11.0cm
16	円筒埴輪	ABEGIL	II	5YR5/6	10	縦ハケ 8/2.0	縦位指ナデ	
17	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	7	縦ハケ 7/1.8	縦位指ナデ	
18	円筒埴輪	ABEGJK	III	5Y5/8	20	縦ハケ 5/1.0	縦位指ナデ	表面磨耗 胴部径12.0cm
19	円筒埴輪	BGHI	II	5YR5/6	10	縦ハケ	縦位指ナデ	
20	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	20	縦ハケ 11/2.6	横位・斜位指ナデ	底部調整(外面板押圧) 底径11.0cm
21	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	10	縦ハケ 10/2.2	縦位指ナデ	底部調整(外面板押圧)
22	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	20	縦ハケ 6/1.6	縦位指ナデ	底面竹管状圧痕 底径12.0cm
23	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	20	縦ハケ 8/1.8	縦位指ナデ	基部粘土板 底径11.0cm
24	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	15	縦ハケ 5/1.1	縦位指ナデ	底面籐圧痕 底径13.0cm
25	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	20	縦ハケ 6/1.5	縦位指ナデ	底径11.0cm
26	円筒埴輪	ABEGIJ	II	5YR5/6	25	縦ハケ 7/1.7	縦位指ナデ	基部上端内面爪痕 底径13.0cm
27	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/8	10	縦ハケ 8/1.6	縦位指ナデ	朝顔形埴輪の頸部 径17.0cm
28	円筒埴輪	ABEGJK	III	5YR5/6	10	縦ハケ 8/1.7	ナデ	朝顔形埴輪頸部
29	円筒埴輪	BCGIJ	I	2.5YR5/6	20	縦ハケ 6/1.3	斜位指ナデ	朝顔形埴輪肩部

第1号墳周溝出土遺物観察表 (第15図)

番号	器種	胎土	焼成	色調	残存率	外面調整 本/cm	内面調整 本/cm	備考
1	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR4/8	10	縦ハケ 8/1.9	斜位ナデ	1号集積、円形透孔
2	形象埴輪	ABEGJK	II	5YR4/8	15	縦ハケ 7/1.5	ナデ	1号集積、器財円筒部 径10.0cm
3	円筒埴輪	BCEGHJK	I	2.5YR5/6	15	縦ハケ	指ナデ	1号集積、円形透孔
4	円筒埴輪	ABEGJK	II	2.5YR5/6	15	縦ハケ 9/1.6	縦位指ナデ	1号集積、内面輪積痕
5	円筒埴輪	BGHJK	I	2.5YR5/6	15	縦ハケ 5/1.1	斜位指ナデ	1号窯外面線刻窯印
6	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	7	縦ハケ 8/1.8	縦位指ナデ	1号窯
7	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	10	縦ハケ	縦位指ナデ	1号窯、小円孔 径11.0cm
8	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	15	縦ハケ	縦位指ナデ	1号窯、内面輪積痕 径12.0cm
9	円筒埴輪	BGHIJ	II	5YR5/6	15	縦ハケ+板押え	縦位指ナデ	1号窯、底部調整 径13.0cm
10	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	15	縦ハケ 7/1.7	ナデ	1号窯、基部粘土板 底径12.0cm
11	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	25	縦ハケ 8/2.0	縦位指ナデ	1号窯、基部粘土板 底径11.0cm
12	円筒埴輪	ABEGJK	II	5YR5/6	25	縦ハケ 8/2.1	縦位指ナデ	1号窯、形象台部か 底径14.0cm

なお、第15図2と7は小円孔の下側に凸帯が付けられていないので、器財形埴輪の円筒部となる可能性がある。

第14図12・14～26及び第15図4・9～12は第1段(底部)の資料である。粘土板を丸めて輪にした基部を製作した後に、連続して粘土紐の巻上げを行っている。基部の高さは26の場合、約10cmある。器肉は中間段より厚くなっており、2cmほどある。製作の最終段階で到立して、底部外面を板で押圧して歪みを修正する底部調整技法を伴うもの(第14図20・21、第15図9)と伴わないものがある。底径は11～13cm、高さは第1凸帯まで残存する資料がないので不明だが、第14図26の場合、12cmの高さで凸帯下側のヨコナテ部分が認められないため、少くとも14～15cmほどあったであろう。底面には篠竹や礫の圧痕が付くものがあり、製作台や乾燥場の状況を示すものであろう。内外面の調整技法は中間段と同様で、外面タテハケ、内面縦位指ナデで統一されている。

なお、第15図12は推定底径が14cmあり、他とかけ離れているので、形象埴輪となる可能性がある。

朝顔形埴輪と明確に把握できる資料は少なかった。第14図27は口縁部の下端付近、29は肩部である。肩部の張りは弱い、頸部で明瞭にくびれる器形をとる。また、口縁部は外反しながら開く。調整技法や凸帯の形状は普通円筒と共通している。

普通円筒についても、破片資料の情報を総合して全体像を推定しておきたい。底径11～13cm、口径20cm

ほどの法量で、2条凸帯の埴輪となる可能性が高い。器高は第1段が14～15cm、第2段が8cm強、第3段が7cmとした場合、30cm前後となるが、第1凸帯の位置が高く、器高のほぼ中間位置となることが注目される。底部調整は画一的に施したのではなく、必要に応じて行われたのであろう。

#### 形象埴輪

周溝覆土及び第1号窯灰原、第1号集積から各種の形象埴輪が出土しており、一括して報告する。胎土、焼成、色調等の特徴は円筒埴輪と共通している。

1～22は人物埴輪の各部である。1は髪を中央部から左右に振り分ける男子頭部で、左眼の一部も残存している。こめかみ部の棒で刺突した穴は美豆良の端部を箆め込んで脱落を防ぐためのものであろう。頭頂部をしぼって成形し、最後に独楽形の粘土塊で閉塞している。2は男子側頭部で美豆良の根元の部分が残る。4も美豆良の付く男子で凸帯を貼って高い肩が作られている。頭頂部の開く冠状の被りものを付けていた可能性が高い。5と6は美豆良の先端部で、裾広がりのもので片側に突起の付く2タイプとなる。7は女子の前額部で、頭頂部は扁平な髻が脱落して大きく開いている。3は首飾りで、粘土紐で玉の緒を表現し、その上に扁平な円形粘土粒を貼って丸玉を示す。8と12は腕で、中実であり、根本は差し込み式になっている。12の形状から、腕を脇に付けるか、前方に捧げるような姿勢が想定されよう。9は肩部、10・11は腋部である。9からは、体部に腕の根本を固定してから首に

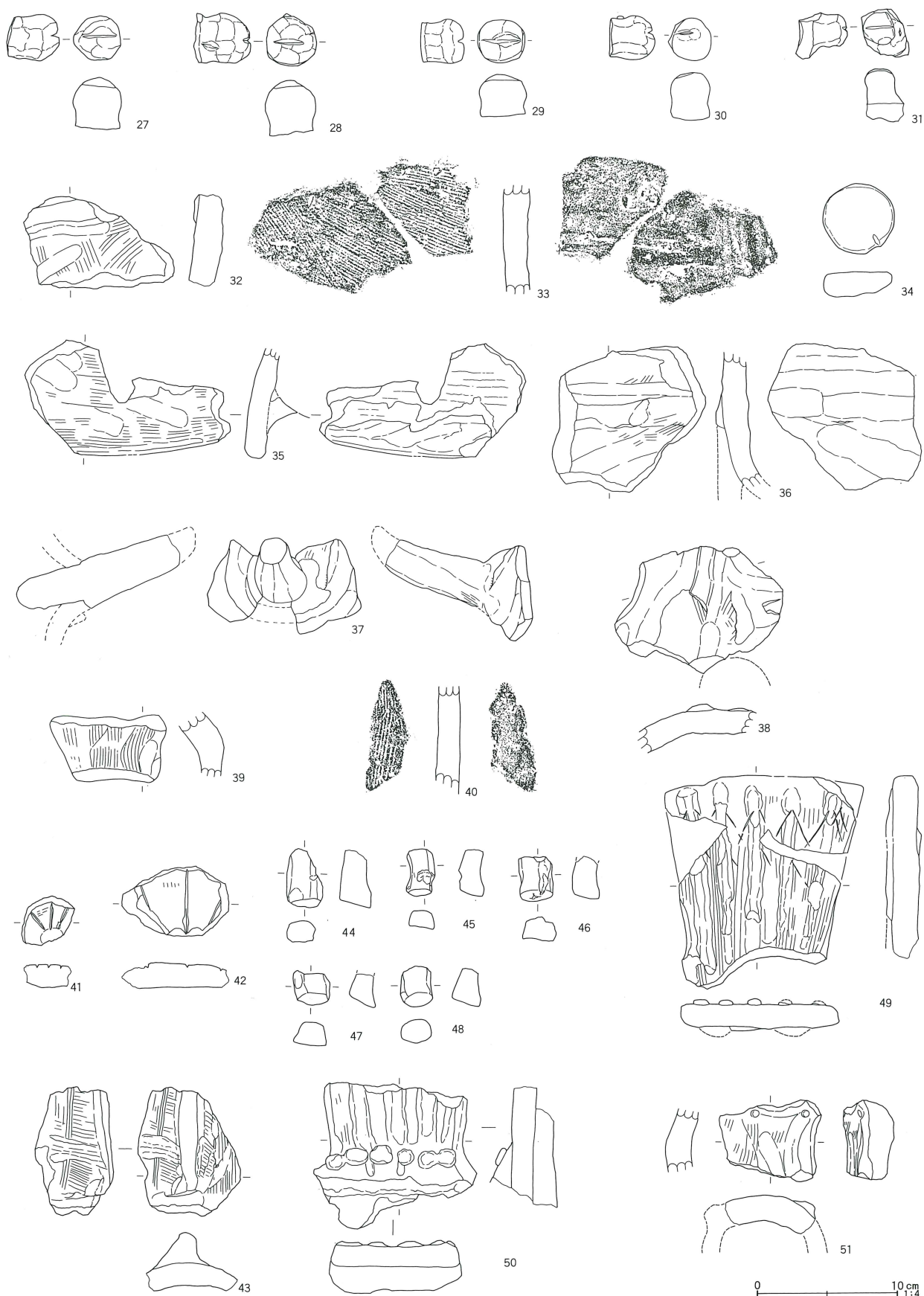
第16图 第1号墳周溝出土遺物(3)



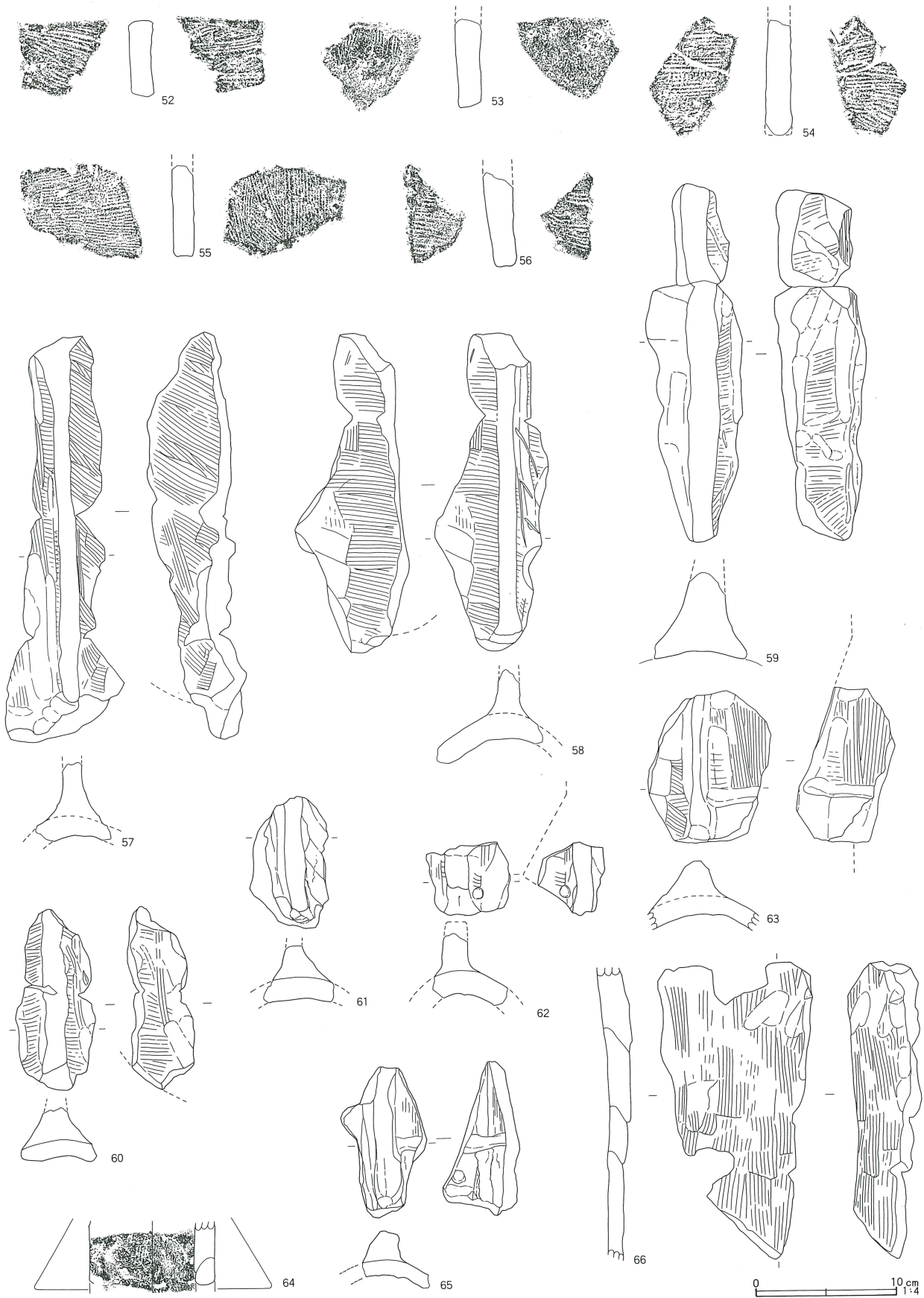
0 10 cm 1:4



第17图 第1号墳周溝出土遺物(4)



第18图 第1号墳周溝出土遺物(5)



第1号墳周溝出土遺物観察表 (第16~18区)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
1	人物(男)頭部	11.2	5.8	9.3	ABG	I	2.5YR5/8			1区南
2	人物右側頭部	7.3	4.5	2.8	ABEGI	I	5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区南
3	人物首飾り	2.5	3.8	2.2	BEGK	II	5YR6/6	ナデ	ナデ	1区中央中下層
4	人物(男)頭部	6.8	6.4	2.3	BEGIK	I	5YR4/8	ハケ+ナデ	ナデ	
5	人物美豆良	2.7	4.3	2.1	BGK	II	5YR5/6	ナデ		1区北墳丘側
6	人物美豆良	5.2	4.0	2.2	BEG	II	2.5YR5/6	ナデ		1区南
7	人物(女)額部	5.0	7.2	3.3	ABEG	II	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ナデ	4区
8	人物腕部	5.5	3.7	3.6	BG	I	5Y6/1	ナデ		灰原南
9	人物肩部	5.0	5.4	1.5	BGK	I	2.5YR5/6	ナデ	シボリ目	灰原南
10	人物腋部	5.0	6.8	2.7	ABGI	I	5YR5/6	ナデ	ナデ	南周溝
11	人物腋部	5.4	5.3	2.6	ABG	I	5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区上層
12	人物腋部	8.0	4.2	3.7	BGIK	II	7.5YR5/6	ハケ+ナデ		1区南
13	人物胸組部	3.5	4.5	1.6	BEGI	II	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	
14	人物胴部	8.5	7.1	1.8	ABEGI	I	5YR4/6	ハケ	ナデ	1区北中下層
15	人物腰部	7.7	5.0	2.7	ABGK	I	5YR5/6	ナデ	ナデ	南周溝
16	人物腰部	7.5	6.3	2.0	BEGIK	I	5YR5/6			南周溝
17	人物股部	8.8	6.7	3.6	ABEGIK	I	2.5YR5/6	ハケ	ハケ	
18	人物股部	8.0	10.5	3.5	ABEGK	I	5YR5/6	ハケ	ハケ	
19	人物胴部	—	—	—	BEGI	II	5YR5/6	ハケ	ナデ	1区
20	人物台部	5.3	6.0	1.2	BGI	I	5YR6/4	ハケ	ナデ	1号集積No.113
21	人物靴部	4.9	6.1	2.8	BEGIK	I	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ハケ	側面ナデ
22	人物上衣裾部	18.0	3.8	—	BEGIK	I	2.5YR5/8	ハケ		1区南、端部~下側ナデ
23	馬形頭部左側面	6.0	10.1	2.4	BGI	II	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ナデ	4区
24	馬形胸繫部	9.0	12.2	1.4	BGI	I	5YR5/6			No.14
25	馬形胸繫部	径4.6	高5.2	—	BEGK	II	2.5YR5/8	ナデ	ハケ	4区
26	馬形胸繫部	7.0	10.2	6.1	BEG	II	2.5YR5/6			1区上層
27	馬形胸繫部	径3.4	高3.6	—	ABGK	II	5YR5/8	ナデ	ハケ	1区南
28	馬形胸繫部	径3.5	高3.8	—	ABGIK	I	2.5YR5/8	ナデ	ハケ	1号窯灰原南
29	馬形胸繫部	径3.4	高3.0	—	BGK	II	5YR5/8	ナデ	ハケ	1区中央中下層
30	馬形胸繫部	径2.8	高3.4	—	ABGK	II	5YR5/6	ナデ	不明瞭	1区中央中下層
31	馬形胸繫部	径2.1	高2.5	—	BG	I	2.5YR5/6	ナデ	調整粗雑	1区北中下層
32	馬形胸繫部	6.5	9.9	2.0	ABGI	II	5YR5/6	ハケ	ナデ	1区南墳丘側
33	馬形体側部	9.7	16.6	1.8	BEGIK	I	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	1区北中下層+1号窯灰原南
34	馬形辻金具	径5.0	高1.7	—	BG	II	2.5YR5/6	ナデ		1区南中下層
35	馬形障泥部	10.0	14.7	3.5	ABEGIK	I	2.5YR5/6	ハケ	木目圧痕	
36	馬形障泥部	10.0	10.5	3.2	BEGI	II	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区南中下層
37	馬形尻尾	5.8	10.9	10.6	BEGK	II	5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区南中下層+中央中下層
38	馬形尻繫部	9.0	12.2	3.3	BG	II	5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区北中下層
39	馬形脚部	4.8	8.4	3.2	BG	II	5YR5/6	ハケ	ナデ	4区南
40	馬形体部	—	—	—	ABEG	II	5YR5/6	ハケ	ナデ	12区灰原下
41	団扇形	3.5	3.4	1.7	ABG	I	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区北墳丘側
42	団扇形	5.0	7.6	1.8	BEG	II	5YR6/4	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	No.2
43	盾形	8.0	5.5	7.3	BGK	I	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	
44	家形堅魚木	4.1	2.5	2.2	BEG	II	5YR5/6	ナデ		1区北中下層
45	家形堅魚木	3.3	1.8	1.8	BEG	II	5YR5/6	ナデ		1区北中下層
46	家形堅魚木	3.2	2.4	1.7	BEG	II	5YR5/6	ナデ		
47	家形堅魚木	2.3	2.6	1.8	BEG	II	5YR5/6	ナデ		2区灰原下
48	家形堅魚木	2.9	2.1	1.7	BEG	II	5YR5/6	ナデ		
49	鞆形上板部	15.2	14.2	2.4	ABGIK	II	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	1区中央中下層
50	鞆形上端部	6.4	10.2	4.5	BGIK	II	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ハケ	灰原南
51	鞆形矢筒部	4.8	7.1	3.6	ABEGK	II	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区南
52	鞆形上鱗部	5.6	6.8	1.6	ABGK	I	2.5YR5/6	ハケ	ハケ	
53	鞆形上鱗部	6.6	8.0	1.8	EGI	II	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ハケ+ナデ	1区中央中下層
54	鞆形上鱗部	8.6	5.9	1.7	BEGI	I	2.5YR4/8	ハケ	ハケ	
55	鞆形上鱗部	6.6	8.6	1.5	BEGK	I	2.5YR5/6	ハケ	ハケ	2区灰原下
56	鞆形上鱗部	7.2	4.4	2.0	ABG	I	2.5YR5/6	ハケ	ハケ	灰原南
57	鞆形上鱗部	28.6	8.3	5.5	BEGIK	I	2.5YR4/8	ハケ	ハケ+ナデ	No.2
58	鞆形上鱗部	22.5	8.1	6.5	BEGIK	I	5YR5/4	ハケ+ナデ	ハケ	
59	鞆形上鱗部	25.3	6.1	6.1	ABEGIK	II	2.5YR5/8	ハケ	磨耗	1区南中下層

番号	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
60	靱形下鱗部	12.8	4.4	3.9	BEGIK	I	2.5YR5/8			灰原南
61	靱形上鱗部	9.3	5.6	3.6	BEGK	I	2.5YR5/6	ナデ	ハケ+ナデ	1区南
62	靱形下鱗部	5.0	4.8	5.4	ABGI	I	5YR5/4	ハケ+ナデ	ナデ	2区灰原下
63	靱形下鱗部	10.7	8.5	3.8	BGIK	I	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	鱗部ハケ、端部ナデ
64	靱形	—	—	—	ABEGK	II	5YR4/8			
65	靱形下鱗部	10.9	5.3	6.0	BEGIK	I	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	1区南中下層
66	靱形円筒部	21.1	12.0	2.0	ABEGIK	I	5YR5/6	ハケ	ナデ	

向って粘土を貼り足していったことがわかる。13は前合わせの上衣の胸紐の結び緒、14は鋸歯文線刻のある胴部である。15と16は貼り込み後に接合することが判明した。腰帯から大刀を吊るして佩刀しており、鞆に足金具が付いていたことになる。17と18は男子全身像の股部であり、膨らんだ褌が下側に付く。21は全身像の靴で、先端が三角形に尖る。平板な粘土板に粘土を貼り足して甲の高まりを表現している。22は半身像の上衣裾部で、本体から離脱している。

23～40は馬形埴輪の各部である。23は側頭部で、素環鏡板を表現した粘土環が剥離している。円筒に側板を付ける型式だが、側板は離脱している。26は低い凸帯で表現する胸繫の上に中実の馬鈴が付く。鈴口はへら先で刻む。24は鈴の剥離した胸繫、25は馬鈴である。27～30は中実の馬鈴で、前述のものより一まわり小さい。31はさらに小型の鈴である。34は直径4.8cmの扁平な円板で、辻金具を表現したものであろう。32は胸繫部、33は首に近い体側部である。35は障泥部で、下側に補強粘土を足しているが体部から剥離している。36は障泥の剥離した体部である。37は尻尾、38は尻繫部である。尻に円孔を開け、中実の粘土棒を差し込んで固定、閉塞をしている。凸帯で尻繫を表現するが、38の場合、向って右に2条の粘土紐で延びており、杏葉か鈴がつくのであろう。

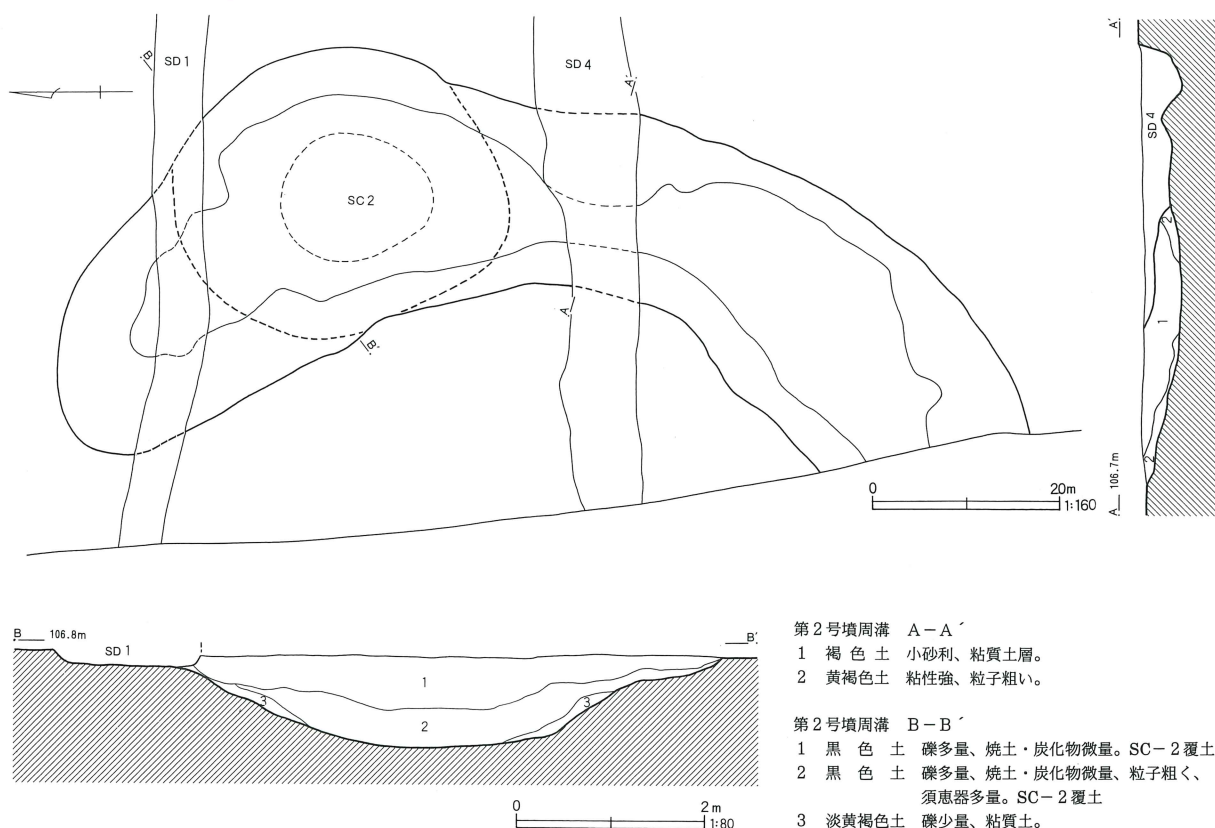
41～66は器財形埴輪の各部である。41と42は扁平な粘土板の表面に放射状の線刻がなされ、要の部分に粘土粒の剥離痕がある。ともに団扇形埴輪の可能性が高い。44～48は家形埴輪の堅魚木であろうか。表面に本体からの剥離痕がある。胎土・色調を含め、5点とも共通の特長を有している。43は盾形埴輪で、円筒部に短い鱗を貼付けて盾面を表現する。49と50は

靱形埴輪の方立部である。共に粘土紐で鎌身を表現する。49ではへら先で逆刺と棘を表現している。50では方立部の根本部分を挟み込むようにして円筒部が閉塞されている。51は矢筒部で、上端に留鉾を表現した粘土粒の剥離痕が2箇所ある。52～61は靱の上鱗部、62～65は下鱗部である。上鱗の上縁部は水平だが、下縁部は下端から緩やかにカーブして、上方で屈曲する。小口部は刀子削りで整形されている。下鱗部には下縁に低い凸帯を貼るもの(63・65)と、凸帯のないもの(62)とがある。62と65には留鉾の表現がある。66は靱の円筒部で、下鱗を取付けて、その脇を指ナデした痕が垂直方向に残る。細身の円筒であり、内面には指ナデ調整を施すが、粘土紐接合痕が残る。

## 第2号墳(第19図)

B・C-3・4・5グリッドに位置する。墳丘は完全に削平されており、周溝のみが残存していた。遺構は調査区外に延びており、全体の40パーセントほどの調査である。周溝の幅は3.60～5.76m、深さ0.98mで、断面形はU字形である。覆土はB-B'土層断面においては、上層が礫を多量に含む黒色粘性土、下層が礫と平安時代の須恵器片を多量に包含する黒色土であった。ともに焼土と炭化物を僅かに含んでいた。平安時代に周溝が全く埋まっていないことは考えられないので、この部分は2次的に掘削され、須恵器片が焼土や炭と共に廃棄されたと見なす。第1号窯からは15m離れているので、別の窯が隣接する調査区外に存在しており、その失敗品を廃棄する土壙として使用されていた可能性が最も高いだろう。第2号集積土壙と命名し、遺物と合せて別途に説明することとしたい。第3層については周溝埋没初期の三角堆積として把握することができる。

第19図 第2号墳周溝



平面形は円形に復原され、その内径は16.16m、外径は25.44mである。北側で周溝が途切れており、陸橋部となる可能性があるが、この方位は後期の横穴式石室を持つものとしては異例である。

第1号墳とは4.4m、第3号墳とは推定値4.6mの間隔で近接している。北側の第4号墳とはさらに近接していた可能性が高い。

第1号溝と第4号溝に切られている。

出土遺物には古墳に伴うと考えられる須恵器壺の口縁部がある。復元口径は22cmあり、外反して開く。口唇部直下と中間部に合計2条の鋭い凸線を巡らし、波状文を2段施文する。細かな波状文は施文が乱れており、均等ではない。口縁端部はつまみ上げて断面三角形に尖らせている。胎土には石英・チャート等の粗砂と雲母を含み末野窯跡群産の可能性が高い。

埴輪は量が79.8gと少なく、細片ばかりなので周辺からの流れ込みの可能性が高い。このため、図化は割愛した。

### 第3号墳 (第20図)

B・C-6・7グリッドに位置する。墳丘は完全に削平されており、周溝のみが残存していた。遺構は調査区外に延びており、全体の僅か5パーセントほどの調査である。周溝の内側立上り部を調査していないので、周溝の幅は不明であるが、深さは0.54mある。外側の立上り部は55度の急傾斜をなし、堀底はその下場が最も深く、約5度の傾斜で、内側に向かって浅くなっている。覆土は上層が礫を多量に含む黒色粘性土、下層が礫を多量に含む暗褐色粘性土である。礫は平均で30cm、最大で50cmほどの大きさで、円礫と扁平な結晶片岩とが混じる。これらは古墳の表面に施設されていた葺石の可能性が高いであろう。

平面形は円形に復原され、その外径は33.6mである。第1号墳とは5.2m、第2号墳とは推定値4.6mの間隔で近接している。

なお、周溝の外側に接する位置に第10号土壇がある。

出土遺物には古墳に伴うと考えられる須恵器がある。

1は提瓶である。周溝内北側からの出土である。体部径22.7cmの大型品で、外面カキメ、内面ロクロ調整を施し、背面を偏平な粘土板で閉塞している。厚みは12.7cmある。肩部には太い環状把手が付く。口縁部は欠損している。結晶片岩、石英などの粗い砂を多く含み、酸化がかった焼成により灰褐色を呈する。末野窯跡群産と推定される。

2～4と7は壺および甕の口縁部である。2は口径24cmを測る壺である。外反して開く口縁部の中央部と口唇部直下に凸線が巡り、2段の波状文を施文する。波状文は屈曲が緩く不均一である。また、凸線はシャープさを欠き、2条の部分と3条の部分とがあつてうまく整合していない。口唇部は上方へ薄くつまみ出して尖らせている。胎土に石英やチャートなどの粗砂を多く含み、酸化がかった焼成によって、にぶい黄橙色を呈し、軟質である。末野窯跡群産であろう。4は2と同一個体の肩部から頸部である。

3は復元口径24.0cmとなる壺の口縁部から頸部である。強く外反して開く口縁部に2条1組の凸線が2組巡り、2段の波状文を施文する。波状文は屈曲が極めて緩く、凸線は両側を沈線で窪めることによって相対的に作り出したもので、ダレている。口縁端部は面を持ち、内側に少しつまみ出している。体部外面は縦位の平行叩きにナデを加えるが、内面には同心円文当具痕が残る。片岩の細礫と石英・長石等の粗砂を多く含み、還元焼成によって灰色を呈し、硬緻である。末野窯跡群産とみられる。

7は復元口径36cmを測る甕口縁部である。外反して開く口縁部に4組の凸線が巡り、4段の波状文を施文する。波状文は屈曲が緩く不均一である。また、凸線は近接する3条の沈線によって相対的に作り出した2条1組のもので、鋭さを欠いている。口唇部は薄くつまみ上げて尖らせている。胎土に石英やチャートなどの粗砂を目立って多く含む。還元焼成によって黄灰色を呈し、比較的硬質である。末野窯跡群産であろう。

5は周溝中央部から出土した須恵器甕底部で、土層断面図A-A'によれば、周溝底から0.60m浮いた状

態で礫群と共に出土している。中型の丸底甕で外面は平行叩きを矢羽状に施し、内面には同心円文当具痕を残す。底部は粘土紐巻き上げで製作し、直径20cmの円盤で穴を閉塞する手法が用いられている。胎土には石英等の粗砂を多量に含み、焼成は良好で、灰色を呈する。

6は中型の丸底壺底部である。外面は平行叩きの後、これをほとんど撫で消すほど丁寧なナデが加えられている。内面には同心円文当具痕が残る。底部は5と同様に、円盤で閉塞する技法が用いられている。胎土に砂の含有が少なく、製作も全体に丁寧であるが、酸化がかった焼成により、黄橙色を呈し、やや軟質である。2・4と同一個体の可能性がある。

8は須恵器甕の体部破片である。内面の接合痕から底部に近い下半部であることがわかる。下端部の器厚が1.8cmを測る厚手の大型品である。中程での曲率計測から60cm前後の復元径が得られるので、体部の最大径が1mに迫るような大型品となろう。外面は平行叩きの後、ナデを加えているが、叩き目を撫で消すには至っていない。内面には同心円文当具痕が残る。石英、片岩等の粗砂を含み、焼成は硬緻であるが、酸化がかった焼成の結果、外面は褐灰色、内面は灰黄褐色を呈する。末野窯跡群産であろう。

これらの須恵器のうち、提瓶は横穴式石室内に副葬される品目であり、壺・甕類も石室前提部に据え置かれるのが一般的であるから、周溝内に自然転落する可能性は考えにくい。したがって、古墳が削平された際に、葺石や封土とともに周溝内に埋め立てられた可能性が最も高いであろう。

なお、埴輪片は皆無であった。ただし、周溝の内側立上り部を調査していないので、古墳に埴輪が伴うか否かは確認できない。

#### 第4号墳（第23図）

B-0・1グリッドに位置する。墳丘は完全に削平されており、周溝のみが残存していた。遺構は調査区外に延びており、全体の20パーセントほどの調査である。また、東側部分は近代の攪乱によって破壊され

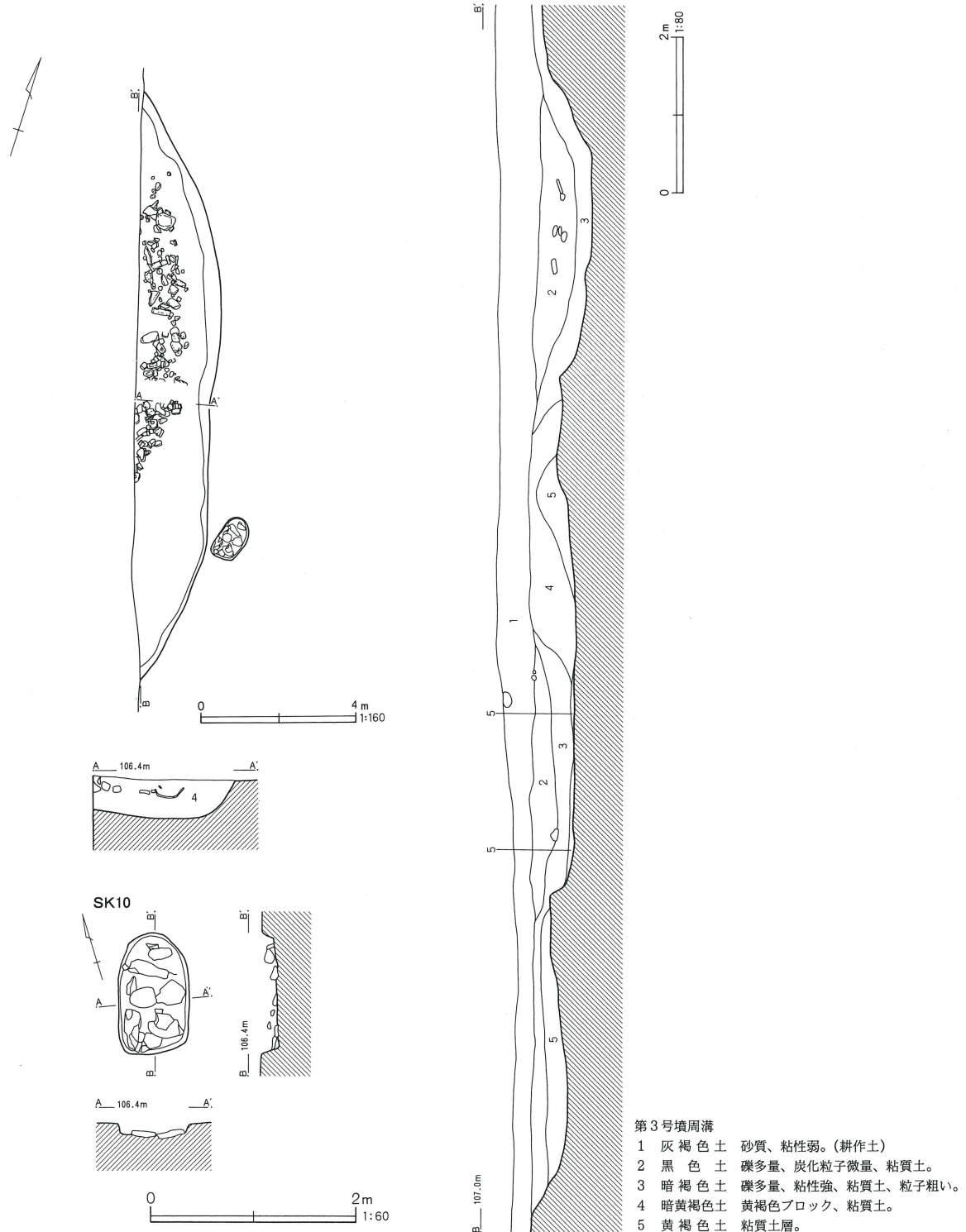
ていた。周溝の幅は1.44~4.00mで一定していない。深さは0.72mで、断面形はU字形である。覆土は上層が礫を多量を含む極暗褐色粘性土、中層が礫と埴輪を含む黒褐色粘性土、下層が暗褐色粘土であった。平面形は円形に復原され、外径は24.0mである。ただし、内側の立上りラインは正円ではなく小判形に歪ん

第20図 第3号墳周溝・第10号土壙

でいる。攪乱が墳丘部にまで及んでいる状況であり、この部分の保存状態が悪いためであろう。墳丘下からは縄文時代中期の敷石住居である第5号住居跡が検出された。

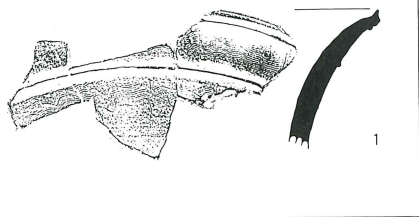
なお、南側にある第2号墳と近接する。

出土遺物には埴輪片5.83kgがある。このうち、実

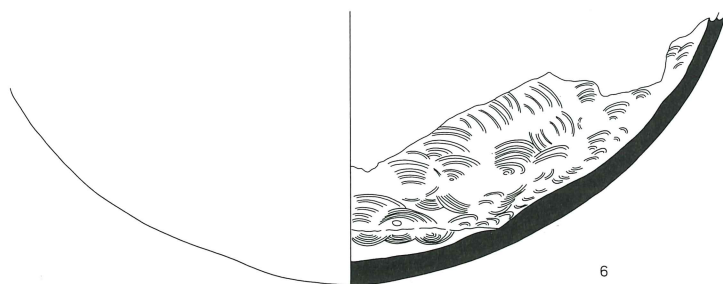
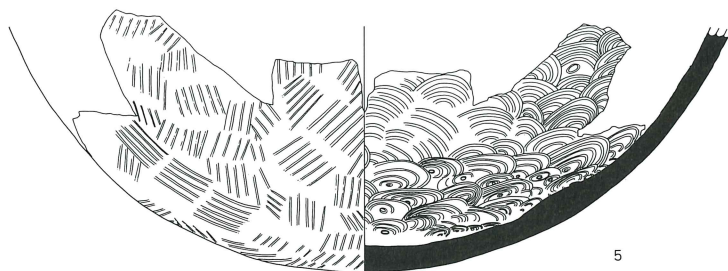
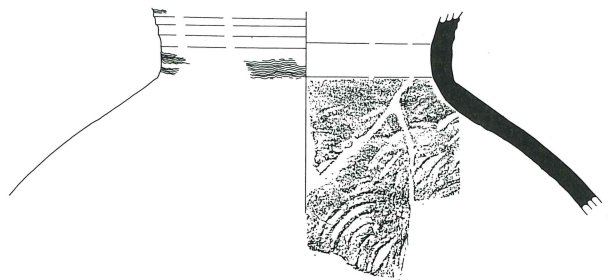
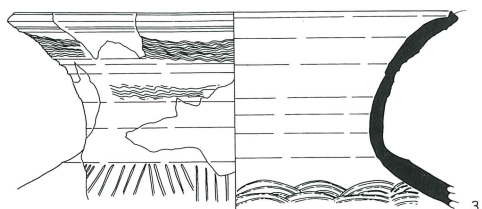
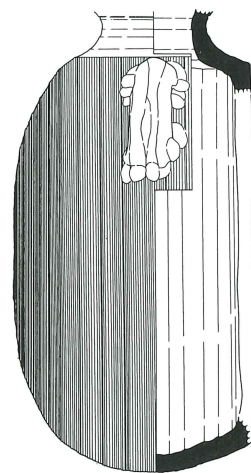
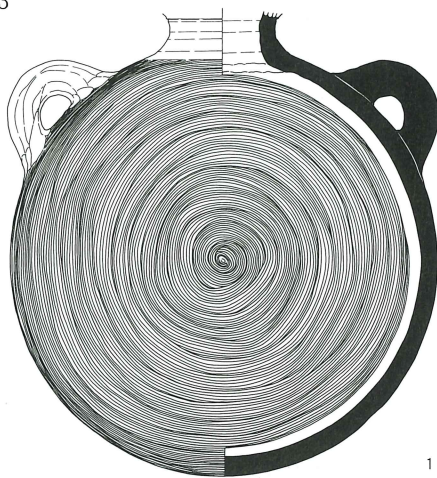


第21图 第2・3号墳周溝出土遺物(1)

SS 2



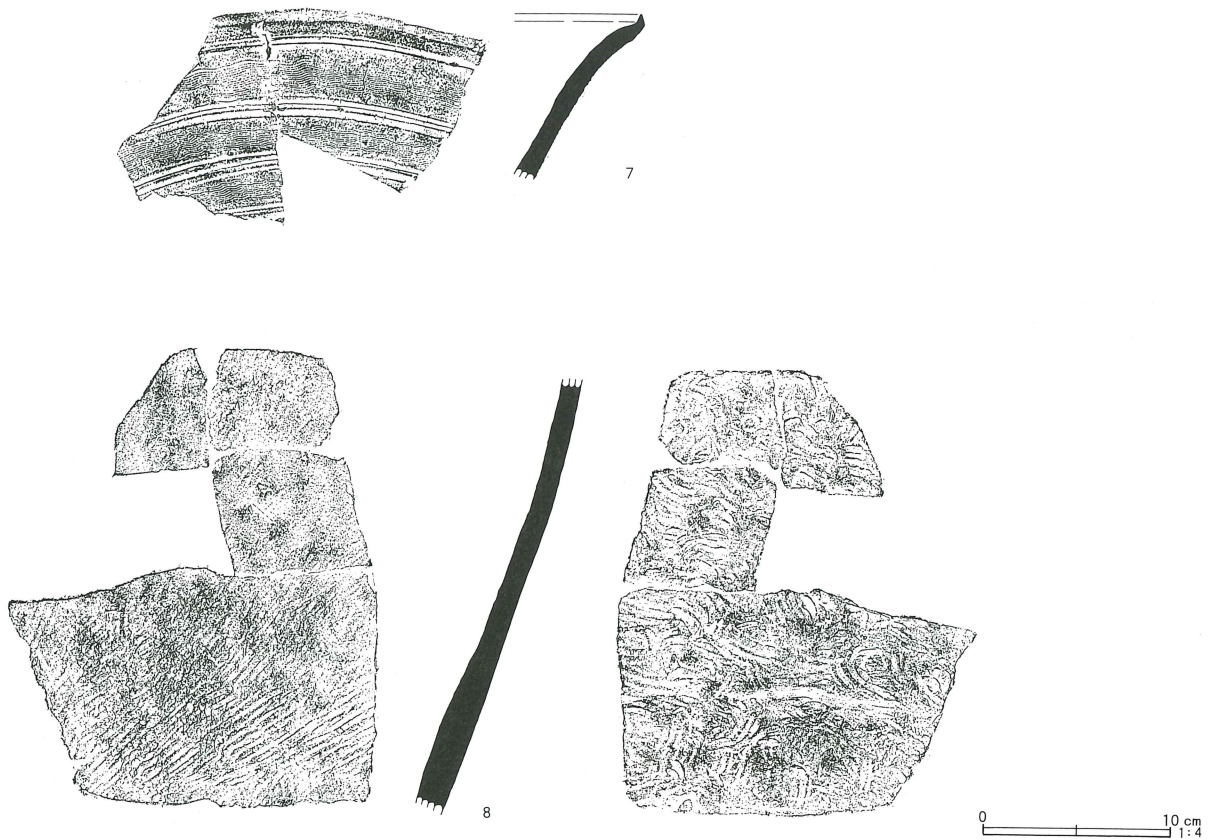
SS 3



0 10cm 1:4



第22図 第3号墳周溝出土遺物(2)



第2・3号墳出土遺物観察表(第21~22図)

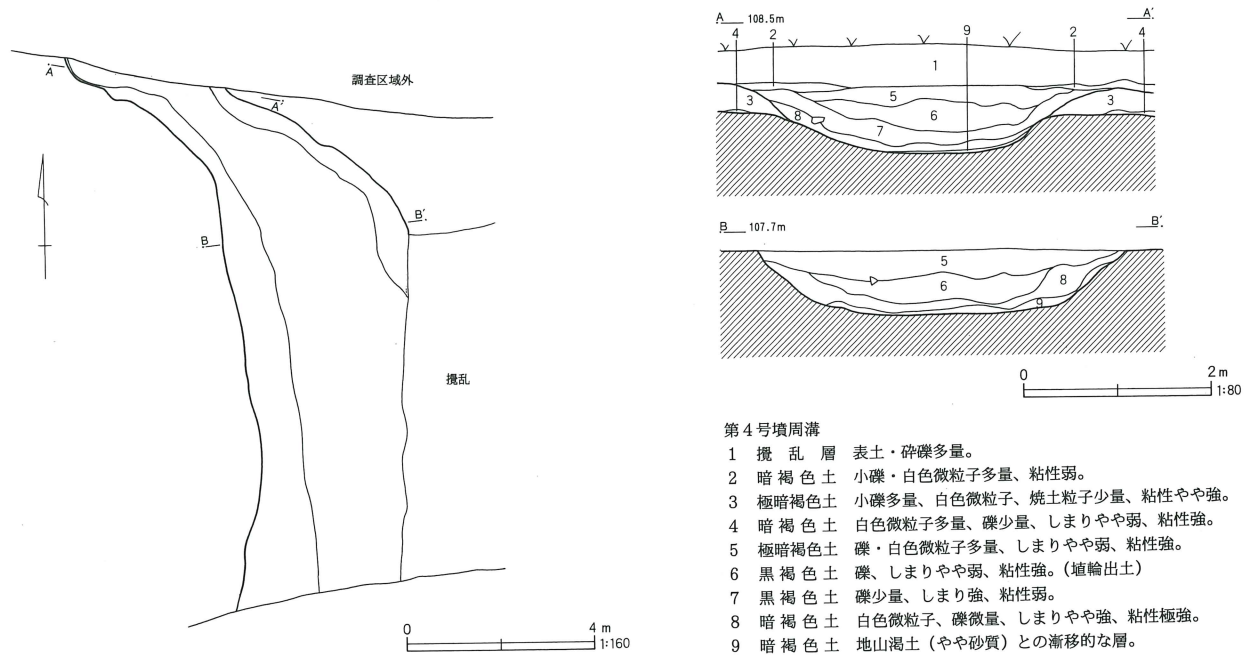
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	—	—	—	BEI	I	淡灰色	10	SS2
1	提瓶	—	24.5	—	BEHI	II	淡灰色	50	SS3
2	壺	—	—	—	ABEI	III	黄灰色	—	SS3、No.1
3	壺	24.0	10.4	—	BEHI	I	灰色	25	SS3
4	壺	—	10.6	—	ABEGI	III	淡褐色	25	SS3
5	甕	—	(13.0)	—	BEI	II	灰色	40	SS3
6	壺	—	(14.4)	—	ABEGI	III	黄灰色	70	SS3
7	甕	—	(8.7)	—	BCEI	II	黄灰色	—	SS3
8	甕	—	(24.0)	—	BEHI	III	茶褐色	—	SS3

測に耐える形象埴輪の破片資料について報告する。

1は馬形埴輪の側頭部で、本体を円筒形に作り、外面に粘土紐を環形に貼り付けて素環の轡を表現している。2は馬形埴輪の鞍部である。馬の背に垂直に貼りつけられた前輪であり、内側には居木の膨らみが表現されている。外面には直線的な線刻の一部が残るが、鋸歯文となる可能性がある。3は種類不明の形象埴輪で、平板な本体に粘土棒を貼りつけている。その縦断面形状は三角形である。4は盾形埴輪の盾面の一部であ

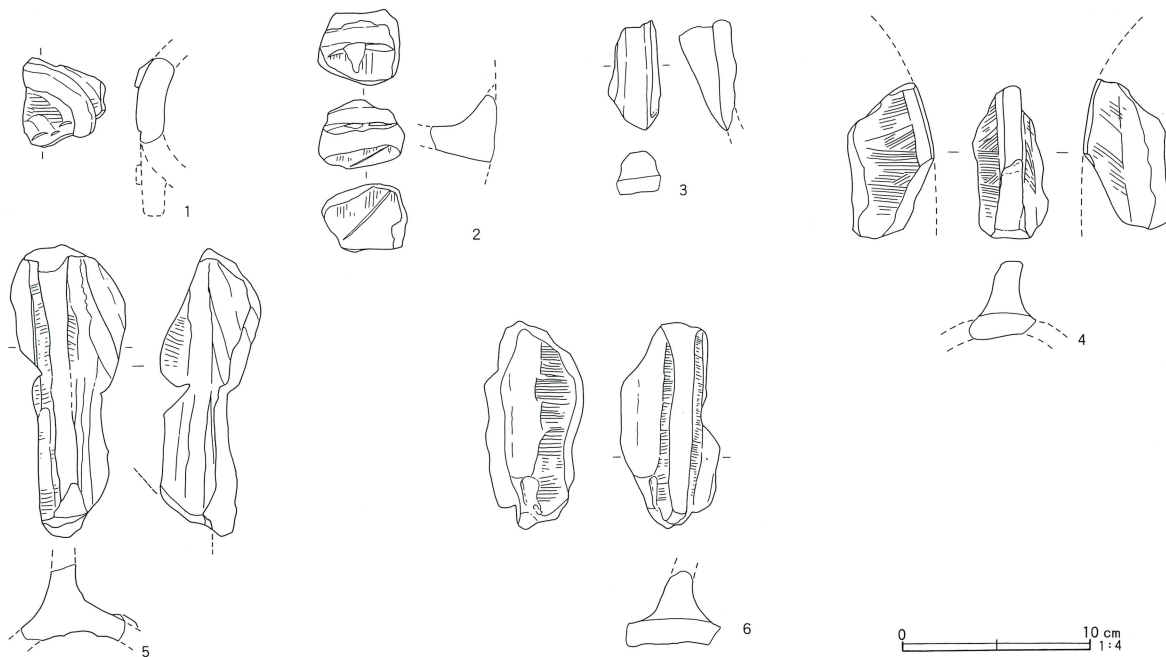
る。円筒部に粘土板を垂直方向に貼りつけて盾面を作るが、貼り付け方は後方へ反っている。側縁は丸みを帯びており、アーチ形の盾になろう。薄手で、製作が丁寧である。また、胎土も他の個体よりも精製されており、砂の含有が少ない。5は鞍形埴輪の本体から上鱗部の付根部分である。鱗の側縁部は緩やかなカーブをもって立ち上がっている。本体部分には凸帯が斜めに貼られており、背負い紐の表現とみられる。6も鞍形埴輪の上鱗部付根部分である。薄手で、製作が丁寧

第23図 第4号墳周溝・出土遺物



第4号墳周溝

- 1 攪乱層 表土・碎礫多量。
- 2 暗褐色土 小礫・白色微粒子多量、粘性弱。
- 3 極暗褐色土 小礫多量、白色微粒子、焼土粒子少量、粘性やや強。
- 4 暗褐色土 白色微粒子多量、礫少量、しまりやや弱、粘性強。
- 5 極暗褐色土 礫・白色微粒子多量、しまりやや弱、粘性強。
- 6 黒褐色土 礫、しまりやや弱、粘性強。(埴輪出土)
- 7 黒褐色土 礫少量、しまり強、粘性弱。
- 8 暗褐色土 白色微粒子、礫微量、しまりやや強、粘性極強。
- 9 暗褐色土 地山褐土(やや砂質)との漸移的な層。



第4号墳周溝出土遺物観察表 (第23図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	外面調整	内面調整	備考
1	馬形頭部	4.6	3.4	2.1	ABGIK	I	2.5YR5/6	ハケ+ナデ	ナデ	端部ナデ
2	馬形鞍部	3.4	4.6	3.6	BEGK	I	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ナデ	
3	不	5.8	2.7	2.2	BEGIK	I	2.5YR5/6	ナデ	ナデ	
4	盾	5.1	4.5	3.6	ABEGK	I	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	
5	靱形上緒部	15.4	5.3	5.9	ABEGK	I	2.5YR5/8	ハケ+ナデ	ナデ	
6	靱形上緒部	10.7	5.1	4.5	ABG	I	2.5YR5/6	ハケ	ナデ	

である。

### 第6号墳 (第4図)

C・D-1グリッドに位置する。墳丘は完全に削平されており、周溝の外側立上り部のみが僅かに残存していた。遺構は調査区外に延びており、全体の3パーセントほどの調査である。また、近代の攪乱によって著しく破壊されていた。幸い、第5次調査によって北側隣接地が調査され、周溝が良好な状態で残存していたので、詳細は次回報告に譲りたい。

出土遺物は皆無であった。

なお、第5号溝によって切られている。また、第4号墳との間には約12mの間隔がある。

## (2) 土 墳

### 第10号土墳 (第20図)

第3号墳周溝の外側に位置し、周溝上場からの最短距離は0.24mである。平面形は隅円長方形で、主軸方向はN-16°-Eである。規模は長さ1.16m、幅0.69m、深さ0.15mを測る。壁面は垂直に掘り込まれ、底面は平坦だが、若干南下がりの傾斜を持つ。内部からは長さ0.3m前後の結晶片岩の板石が10点ほど出土している。これらの礫の多くは底面に密着しており、敷設されていた可能性が高い。ただし、小型の礫の中にはやや浮いて出土したものがある。

副葬品、人骨とも検出されていないが、第3号墳に伴う副次的な埋葬施設の可能性がある。

### グリッド出土遺物観察表 (第24図)

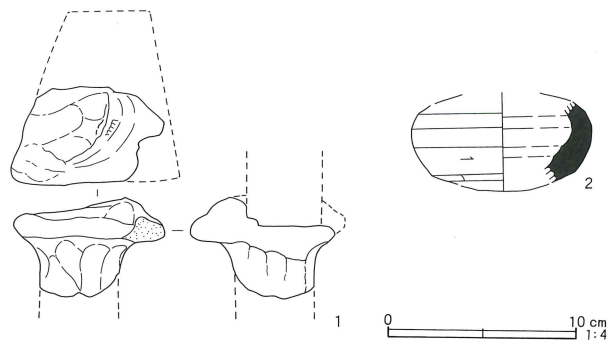
番号	器 種	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	大刀形埴輪	長 4.9	幅 8.0	厚 5.3	ABGHI	I	明赤褐色	—	柄頭部、外面ナデ調整
2	甕	—	—	—	BCGH	I	灰 色	15	体部径9.6cm

## (3) グリッド出土遺物

グリッドから出土した古墳時代の遺物として形象埴輪片と須恵器片がある。1は大刀形埴輪の柄頭部である。断面円形で中実の柄部に平面形が台形と推定される板状の柄頭が付く。さらに柄頭の上面にも円形の剝離痕があるので、円筒形の勾金受が付く可能性がある。出土場所は第2号住居跡付近の第3号溝覆土(E-8グリッド)である。第1号墳に接する位置であり、第3号溝が第1号墳の周溝を切っていることから、もとは第1号墳周溝に包含されていたとみて誤りないであろう。

2は須恵器甕の体部である。胎土には石英、雲母、砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈する。偏球形の器形を示し、外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデが施されている。文様はない。復元体部径は9.6cmである。第3号溝のクランク部(E-10グリッド)からの出土である。

第24図 グリッド出土遺物



### 3. 平安時代の遺構と遺物

#### (1) 住居跡

##### 第1号住居跡 (第25図)

本住居跡はF-8グリッドに位置し、2区南東部に存在する。遺構は調査区外に延びており、全体の50%ほどの調査であった。

平面形は隅丸方形を呈する。規模は2.7m×(1.5)mで、深さ0.3mである。カマドを基準とした主軸方向はN-104°-Eを示す。

住居跡の掘り込みは土層断面では0.42mあり、壁はほぼ直立する。埋土はほぼ自然堆積と考えられる。

カマドは東壁のやや南よりに設置される。燃烧部は比較的よく焼けている。カマド土層断面の第3層が天井崩壊土で、第4層が灰層である。煙道部は壁を掘り込んで構築される。袖は茶褐色粘土を用いて床上に貼

り付けている。貯蔵穴は発見されなかった。

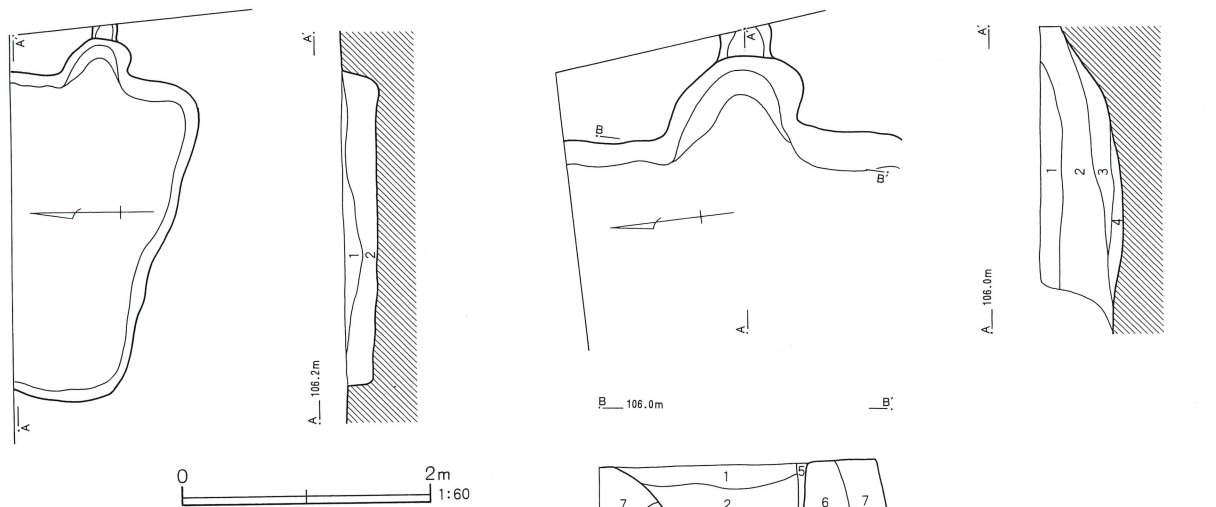
床面はほぼ水平で、床面全体が比較的堅緻であった。柱穴および壁溝は検出されなかったが、床面の西よりの位置に浅い土壙が掘り込まれていた。長方形プランで、規模は幅0.36m×長さ0.48m以上×深さ0.10mを測る。

遺物は覆土中からほとんど出土していないが、カマドの前面で床面中央部となる位置に比較的集中しており、床面直上に貼り付いていた。

図化できたものは僅か2点であった。1は須恵器広口壺である。長い頸部が上方で外反し、口縁部を上下に拡張するタイプとなろう。内外面とも回転ナテ調整が施されている。酸化焰焼成であり、軟質である。

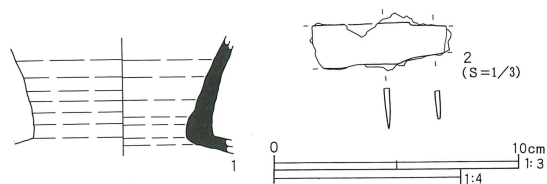
2は鉄製刀子である。切先と茎先を欠失している。関は浅い両関である。

##### 第25図 第1号住居跡・カマド・出土遺物



##### 第1号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子・白色粒子多量、しまり強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 炭化物混入、しまり強、粘性やや強。(遺物の多く本層出土)



##### 第1号住居跡カマド

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子混入、粒子細かく、粘性強。(土器片少量)
- 2 暗茶褐色土 粒子細かく、粘性強、粘土層。
- 3 茶褐色土 赤色焼土粒子・ブロック、カマド天井崩落層。
- 4 黒褐色土 炭化物、焼土層。
- 5 赤色土 カマド袖被熱部。
- 6 茶褐色土 カマド袖部粘土。
- 7 暗褐色土 炭化物・焼土粒子、粒子細かく、粘性強。

##### 第1号住居跡出土遺物観察表 (第25図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	—	(6.2)	—	ABEGI	III	褐色	35	
2	刀子	長5.6	幅2.2	厚0.2	—	—	—	—	重量8.23g

## 第2号住居跡（第26・27図）

本住居跡はE-8グリッドに位置し、2区の南よりに存在する。

平面形は少しひしゃげた隅田方形を呈し、規模は東西4.7m×南北4.3mで、深さ0.48mである。北側のカマドを基準とした主軸方向はN-6°-Wを示す。

住居跡の掘り込みは浅く、壁はほぼ直立する。覆土は自然堆積と考えられる。

カマドは北壁のやや東よりと東壁のやや南よりとに合計2基が設置されている。ともに燃焼部はよく焼けている。東側カマドでは土層断面の第3層が天井崩壊土で、その直下に灰層はなかった。煙道部は壁を掘り込んで構築されている。袖はともに粘土を床面に貼り付けて造っており、結晶片岩の板石を芯に用いていた。

貯蔵穴は北側カマドの東側に位置し、円形を呈する。規模は直径0.78m、深さ0.13mを測る。

床面はほぼ水平で、中央部分が比較的堅緻であるが、周辺部は軟らかい。明確な柱穴は検出されなかった。壁溝はカマド部分と入り口部以外は全周する。入り口部は南壁中央部にあり、壁溝の途切れる部分の内側に浅い半円形の窪みが設けられている。

床面のほぼ中央部には2基のピットが掘り込まれており、切り合い関係が認められた。第1号ピットは直径0.75m、深さ0.24mの円形ピットの中心部に直径0.24m、深さ0.27mの小さなピットが掘り込まれた二重ピットであった。第2号ピットは一回り小さく、直径0.45m、深さ0.24mの円形ピット内に直径0.15m、深さ0.15mの小さなピットが掘り込まれた二重ピットであった。これらは須恵器製作用のロクロピットの可能性が考えられる。新旧関係は第1号ピットが第2号ピットを切っており、新しい。

また、南西隅付近の床面には粘土貯蔵用の土壌が掘り込まれていた。平面形は楕円形で、規模は東西1.20m、南北0.99m、深さ0.18mである。断面形は播鉢状で、壁面の立上り方は緩やかであった。内部には上から、粒子の細かい暗褐色粘土、塊状の白色粘土、粒子は粗いが粘性のある暗褐色土が層序をなして貯蔵

されていた。ロクロピットと合せて考えると、須恵器製作用の粘土生地であった可能性が高い。恐らく3種類の粘土を混ぜ合わせて用いていたのであろう。

ロクロピットの南側にも2基のピットが切り合って存在していた。この内、大きな方は直径0.78m、深さ0.21m、小さな方は直径0.54m、深さ0.27mあり、断面形は逆台形であった。須恵器製作に関連する遺構の可能性はあるが、具体的な使用法は不明である。あるいは、製作した甕などを据える穴であったのかもしれない。このほかにもやや小規模なピットが合計4基床面に掘り込まれているが、その配置は不規則であり、建築構造を支える柱の穴であったか否かは不明とせざるをえない。

遺物の多くは第2層からの出土であるが、原位置を留めるものは東側カマド燃焼部内及び南東隅の床面に集中していた。とくに、東側カマドの煙道部には土師器甕が底を抜いた状態で逆さまにはめ込まれており、注目された。また、床面から少し浮いた状態で礫が多量に出土した。分布は北側カマド燃焼部上とその東側の床面上を中心としていた。礫の大きさは、長さ10~50cm大、平均30cmほどで、結晶片岩の角礫が多かった。もともと堅穴の外側に壁体として積まれていたものが、崩落した可能性が考えられる。

出土遺物は須恵器高台付坏と土師器甕を主体とし、他に瓦片と土製紡錘車がある。

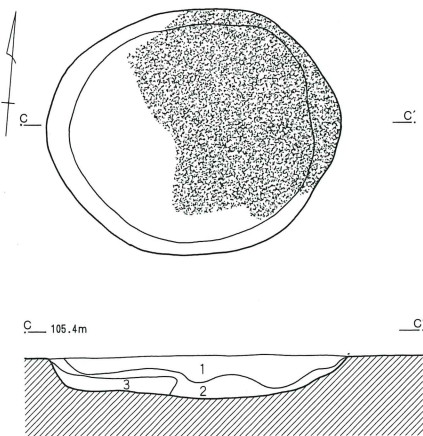
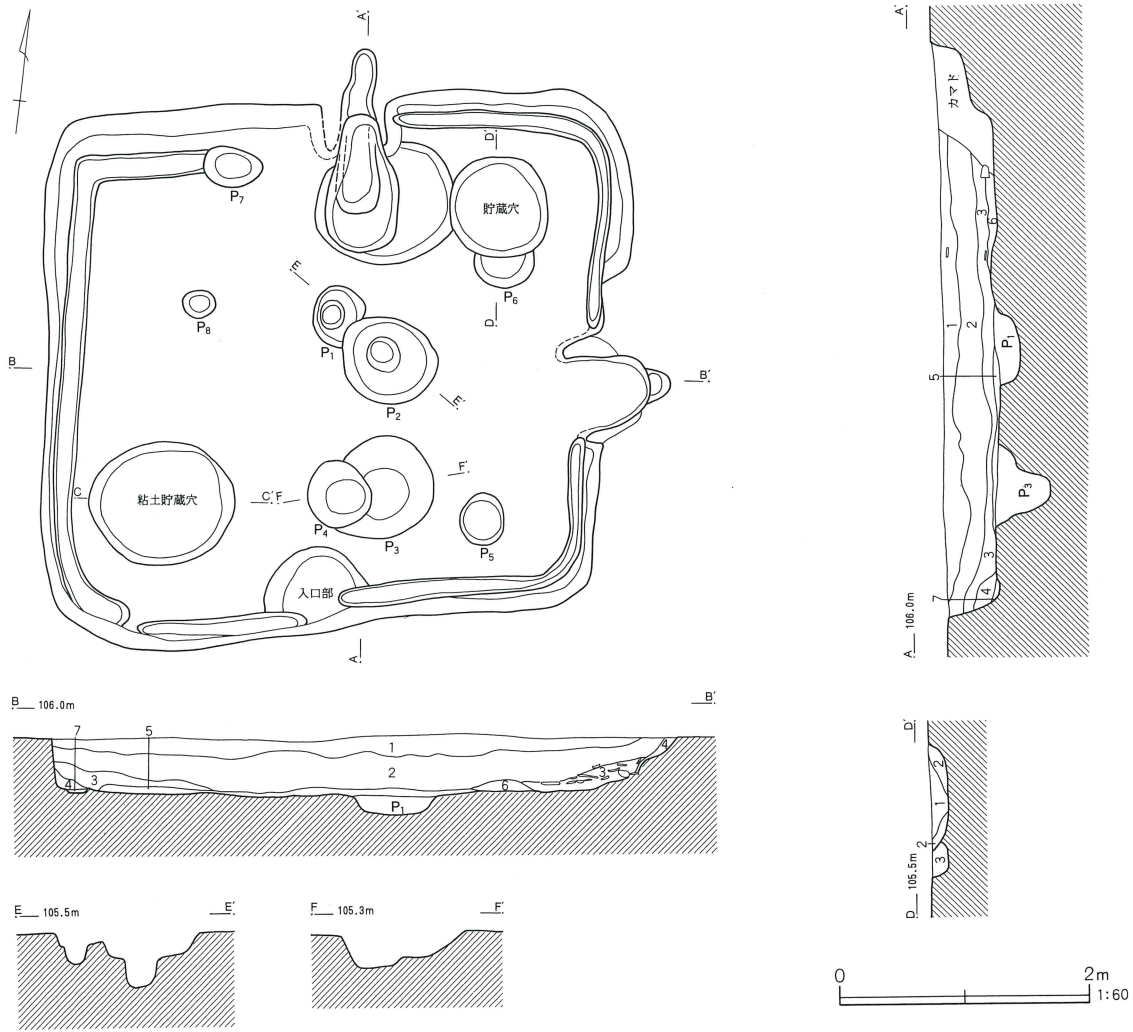
### 須恵器坏（1・2・6）

1と2は小型の坏で復元底径は4.5cm前後となった。残存率が低く、もう少し大きい可能性もある。体部は少し内湾気味である。口縁部は、おそらく直口の深手のものとなろう。6は焼け歪みの著しい坏である。もとは高台があり、その剝離面を調整して使用している。口径は長径で15.2cmを測る。体部の張りが無く、口縁部が著しく肥厚する。器肉が部厚く粗雑な作りである。底部は回転糸切り後にナデを加えている。

### 須恵器高台付坏（3~5・7~20）

4・5・8~10は体部の張りが弱く、口縁部が僅かに外反する形態で、第1号窯の高台付碗B1類に類

第26図 第2号住居跡



第2号住居跡

- 1 暗褐色土 炭化物・焼土粒子・白色粒子多量、しまり強、粘性弱。
- 2 暗褐色土 炭化物混入、しまり強、粘性やや強。(遺物の多く本層出土)
- 3 茶褐色土 炭化物・焼土粒子、しまりやや弱、粘性強。
- 4 灰茶褐色土 3層に似るが、地山砂質土多量混入、しまり弱、粘性やや強。
- 5 灰褐色土 やや砂質、しまり弱、粘性弱。
- 6 赤褐色土 炭化物・焼土多量、しまり弱、粘性強。
- 7 壁溝覆土 しまり欠。

第2号住居跡粘土貯藏穴 C-C'

- 1 暗褐色粘土 粒子細かく、粘性極強。
- 2 白色粘土 粘土塊状。
- 3 暗褐色土 粒子粗く、粘性強。

第2号住居跡貯藏穴 D-D'

- 1 暗褐色土 地山・焼土ブロック多量、粘性強。
- 2 暗褐色土 焼土・地山ブロック少量、粘性強。
- 3 黒褐色土 地山粒子若干、粘性強。

するが、器高が相対的に低く、坏として扱う。口径は13cm代のものと14~15cm代のものがあり、それぞれ小型と中型に相当しよう。高台は低く直立し、断面が方形のものと逆三角形のものがある。5のみが酸化焰焼成でやや厚手の作りである。なお、9の見込にはへら描きの正方形がある。

3は口径16cmの大型品である。体部下半に張りがあり、薄手で丁寧な製作である。

7と11~13は著しく焼け歪んでいるが、完形品であり、前述の坏とともに使用痕跡がある。沓形茶碗に類し、手に持ちやすいという利点がある。13を除けばすべて器肉が部厚く、製作が粗雑である。高台は低く、ほとんど無調整である。口径14cm代で、器高は6cm前後あり、精製の5・8・9より高い。14~16は高台の内側が強く撫で付けられるもので、4・8のような小型品となろう。すべての個体で底部は回転糸切り離しが行われている。

#### 土師器甕 (21~24)

21・23・24は武蔵型のコの字状口縁甕の著しく退

化したものである。頸部は短縮化し、直立せずに内傾しており、体部との境界が不明瞭である。僅かにコの字状の痕跡を留めている。体部は肩の張りが無く、最大径が中位にある。体部下半の外面に斜位のへらケズリ、上半の外面に横位のへらケズリを施す。器肉はやや厚ぼったい。22は部厚い口縁部がくの字状に屈曲する甕で、体部は横位のへらケズリを施す。

#### 灰釉長頸壺 (25)

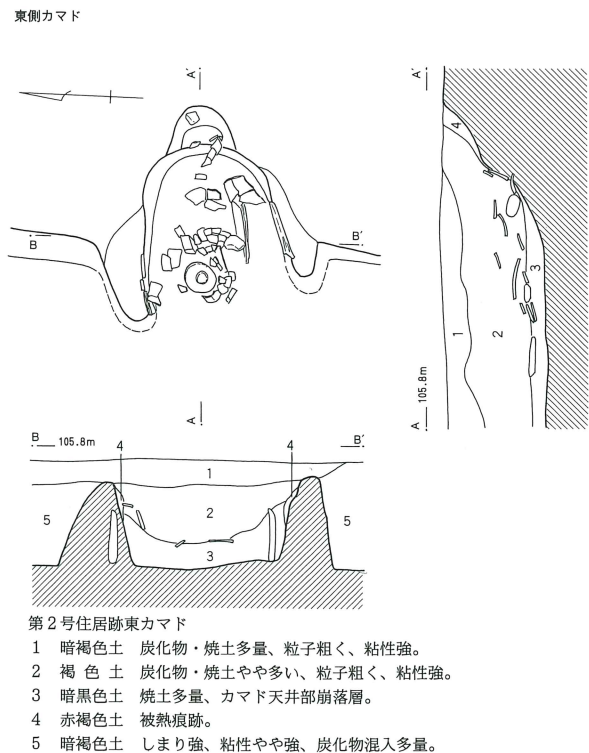
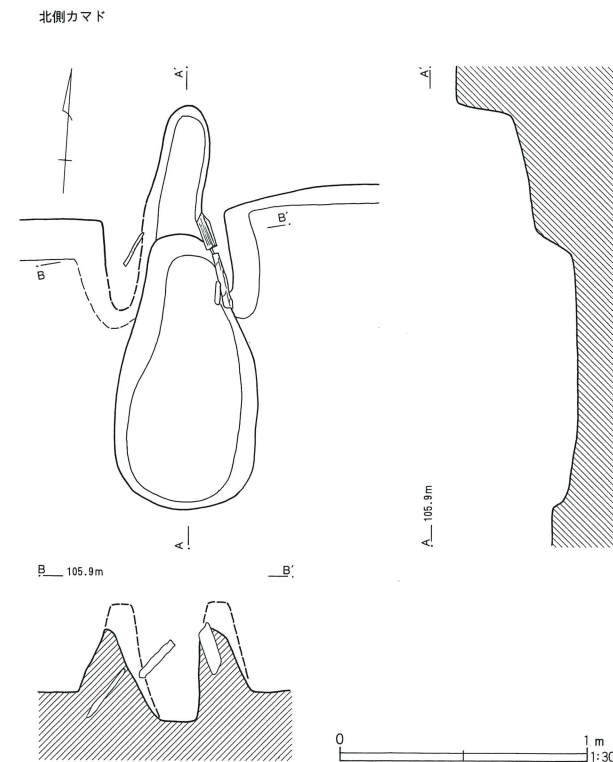
体部外面は回転へらケズリを施す。底部は幅の広い蛇の目高台が付く。内底面と外面にオリーブ色の降灰が付くが、現存部は無施釉である。胎土は細かく精良。

#### 瓦 (26)

平瓦の破片で、内面には布目が付く。外面は叩きの後にケズリ調整が加えられている。

#### 土製紡錘車 (27)

厚手の土師器甕体部片の周縁部を擦って調整し、中心部に円孔を開けている。直径6.5cm、厚さ1.0cm、重量は50.0gである。

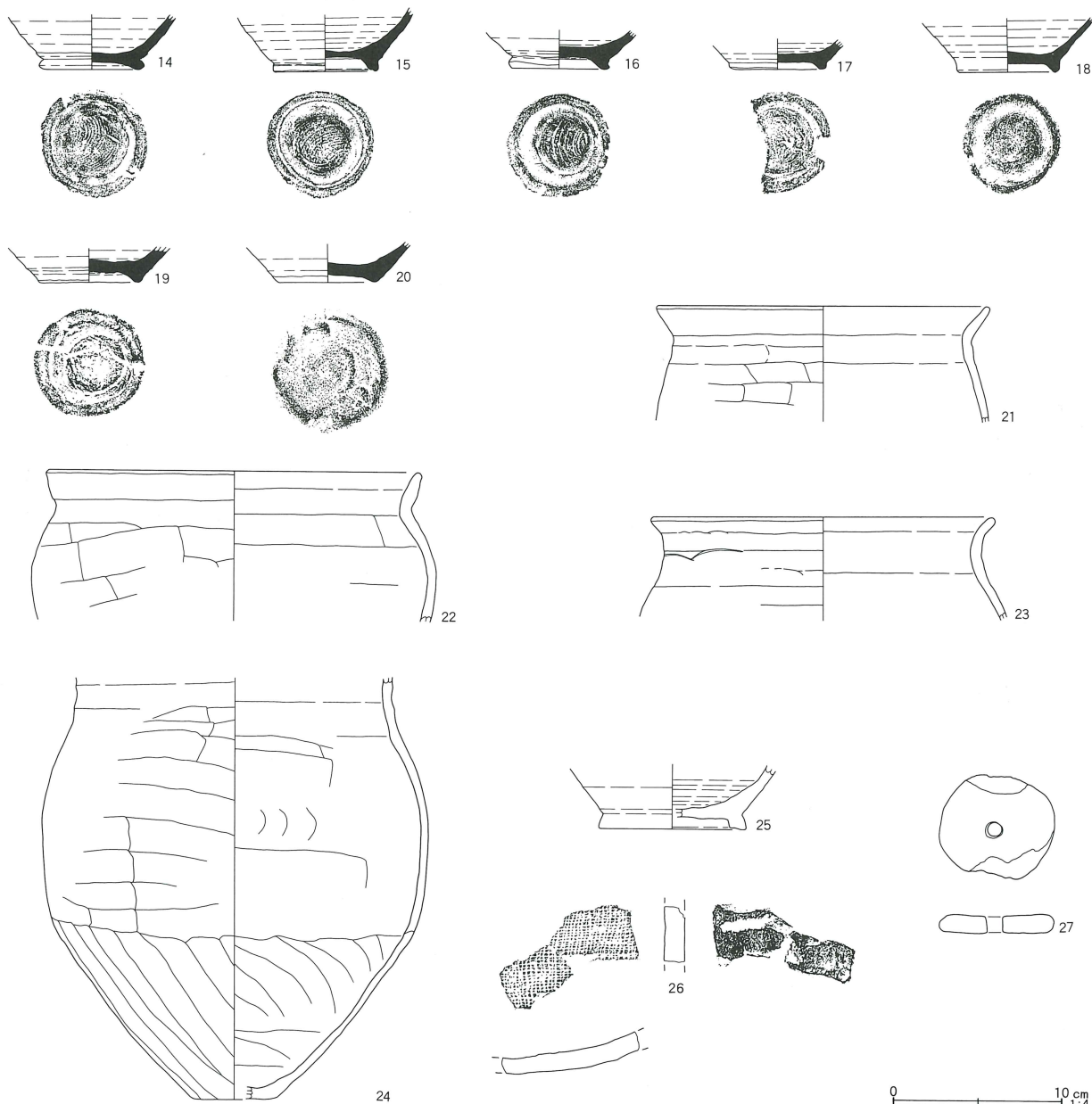


第28图 第2号住居跡出土遺物(1)





第29图 第2号住居跡出土遺物(2)



第2号住居跡出土遺物觀察表(第28~29图)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	—	(2.6)	(4.6)	BEHI	II	淡灰色	10	
2	坏	—	(3.2)	(4.4)	BEH	III	暗灰色	20	
3	高台付坏	16.0	(5.3)	—	BEHIJ	II	灰褐色	40	
4	高台付坏	13.5	6.0	5.6	BEHI	II	淡灰色	50	No.32
5	高台付坏	13.1	5.0	6.4	ABEGHI	III	褐灰色	90	No.1
6	坏	15.0	6.8	5.9	BEHI	II	灰褐色	95	No.2
7	高台付坏	14.3	6.8	5.9	BEHIJ	II	灰褐色	100	No.1
8	高台付坏	(14.2)	5.1	(6.4)	BEIJ	II	淡灰色	30	
9	高台付坏	(15.6)	5.6	(7.7)	ABEIJ	II	淡灰色	40	No.4
10	高台付坏	—	(5.0)	(6.0)	BCEGI	II	淡灰色	30	
11	高台付坏	14.0	6.4	6.6	BCEHI	II	灰褐色	100	No.7
12	高台付坏	14.3	7.0	6.2	BEHI	II	灰褐色	90	No.3
13	高台付坏	13.7	6.1	5.7	BEHIJ	II	灰褐色	100	No.2・8
14	高台付坏	—	(3.2)	(6.2)	BEIJ	II	灰褐色	30	
15	高台付坏	—	(3.7)	6.3	BEHI	I	灰色	50	